

家庭・保育所・幼稚園

幼児の教育



第八十三卷第二号
日本幼稚園協会

2

幼児の動きのリズム

新版 自由表現ABC

子どもの創造性を育てる自由表現

感情のおもむくままを自分の体の動きで示す自由表現は、子どもの創造性を育てる第一歩になります。

本書では、子どもの単純な自由表現から出発し、それを発展追求して肉づけし、最終的には舞踊劇の作品に仕上げるまでをわかりやすく解説しました。

振付け、楽譜をつけ、保育者の方々が使いやすいよう編集してあります。

藤田妙子・著

B5判・128頁・定価1,300円

新版 幼児の生活とカリキュラム

三層構造の生活プラン

子どもの社会性と集団を育てるために

カリキュラムは形だけつくったのでは意味がありません。園生活において、子どもたちの生活がどのように展開されていくか、その方向づけをするものであってほしい。

著者は子どもたちの園生活を、「課題活動」「遊び」「生活の仕事」の三層でとらえ、実践を通じて、子どもの生活集団と社会性の発達をあとづけていきます。

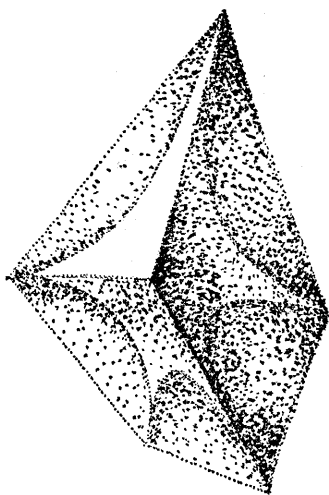
大場牧夫・編著

B5判・216頁・定価1,800円

くわしくは、フレーベル館代理店・支社・支店・営業所または本社営業課(03)292-7781(代)にお問い合わせください。

フレーベル館

幼児の教育



第八十三卷 第二号

幼児の教育 目次

—第八十三卷 二月号—

© 1984

日本幼稚園協会

就職シーズンに思うこと……………佐藤文子…(4)

なぜ「みんないっしょ」なのか

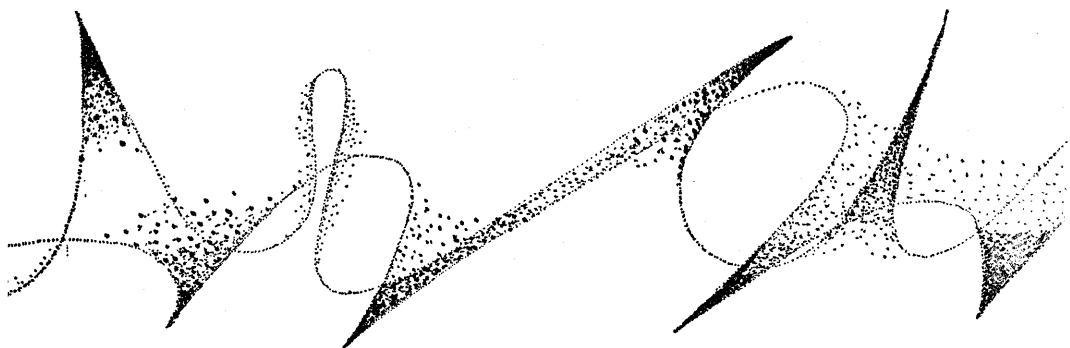
—望ましい幼児教育への問い—……………伊藤隆二…(6)

韓国幼稚園教育(一)

—創立期の特性—……………李相琴…(15)

幼がたり

流れと雑魚……………川崎千束…(22)



しもやけ……………豊田一秀…(35)

管見・フランスの子どもの世界

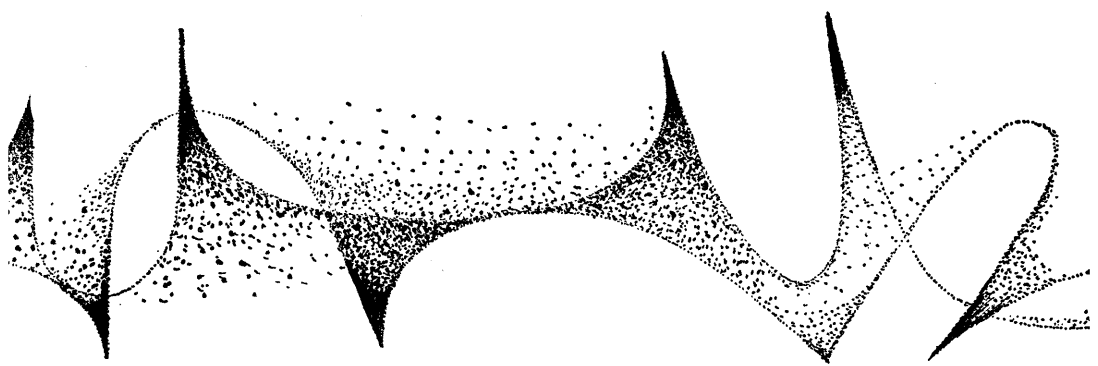
——規範のしつけの問題を中心に—— ……宮島 喬…(37)

◆子どもの作文から……………(50)

閉じた世界が開ける体験……………津守 真…(52)

近代短歌に現われた子ども(十六)……………大塚雅彦…(56)

表紙 紙 安田 淡
表紙題字 比田井和子
カット 福田 理恵



就職シーズンに思うこと

佐藤 文子

十一月一日、就職試験解禁ですがに四年生の姿はまばらである。まだ見通しのつかぬまま必死の面持ちで出かけた学生のことを思ったりする。十月末から十一月初めにかけては、公務員試験の最終結果もほぼわかり、研究室は明暗こもごも。私も人文社会科学部に移って三年目、最初は四年生に「就職試験にふりまわされないように」などといっていたが、九月から十一月にかけては、どうもおちつけない。今ここで現代の就職問題を論評する気はない。ただ就職シーズンに増幅してみられる学生の態度が日頃気になるのである。

まず第一は、希望先に就職はできない——就職試験におちたというだけで、自分をダメな人間として評価してしまふ。就職は人生の大事な方向決定であり、希

望通り就職できない人の落胆はわからなくはない。しかしどうもそれだけではなさそうである。偏差値、共通一次試験成績……と外の基準で自分を評価することになれてきた現代の学生は、自分のうちに自分を評価する基準をもたないように思われる。第二に、学生は就職雑誌や先輩たちから情報を得て、自分の希望就職先を決める。つまり先ず自分が就職先を選別し、序列づけするのであるが、彼らの意識においては、自分が序列づけられ、選別される側面だけが鮮明である。自分の選からもれた企業のことなど思ってもみない。

どうも学生は自分を「される」側におくのが好きらしい。私は今、臨床心理学実習を開講している。最初の時間に、絵本『はせがわくくんきらいや』を紹介し、その後「ぼく」がカウンセラーを訪ねる場面を想定し、ぼくとカウンセラーのロールプレーをした。カウンセラーはぼくにいろいろ質問したり、ヒソミルクについて説明して、ぼくに長谷川くんのことを理解させようと努力する。しかしぼくはカウンセラーの質問は

とんちんかんで、全然気持を理解してもらえたようには思えない。そこで役割を交替すると、今まで「ぼく」だったカウンセセラーは先のカウンセセラーと同じ質問や説教をくりかえす。そうしながら自分は、ぼくを理解しようとするという。

なぜカウンセセラー役になると相手の気持を理解するのが難かしくなるのだろうかを話し合っているうちに、ある学生が次のようなことを言った。「私はどうしてもカウンセセラーの立場に身をおくことができない。カウンセセラーだけではなく、親、教師についても同じだろう……結局私は被教育者、被支配者、被抑圧者、弱い者であり、教育者、支配者、抑圧者、強い者の世界はわからない……」

彼にとって世界は二つに分かれているようである。

強者の世界と弱者の世界に。私は彼に問うた。「今は子ども、学生、被教育者、被支配者、弱い者の立場に完全に身をおいているけど、卒業して教師、カウンセラー、あるいは親になったらどうなるのか」と。する

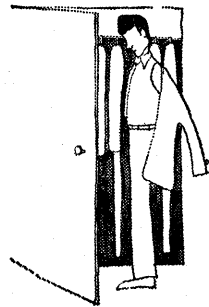
と、「その時には良い親、良い先生、良いカウンセセラーになるようがんばります」という。自分の中に弱い者と共に存在する強い者、支配者、抑圧者に気づかず、異なる立場にある人の気持を共感できない人が頑ばったら、どんな親や教師になるのだろうかと私は不安に感じながら、この問題こそ私たちが学生と共に解決していかなければならない課題なのだろうと思った。

私は「させられ」意識が嫌いである。現代において、自分の行為が社会にどんな影響を与えるのかわかることは難かしく、影響される面のみが気づかれやすい。しかし幼稚園、小、中、高校、大学それぞれが、直接的人間関係において子ども、あるいは学生が相互の行為の意味を理解するような指導はできるであろう。人間関係の相互性を十分に自覚できれば、世界を単純に二分し、自分を専ら「される」側におくことはしないだろうと思うのである。

二月、受験シーズンの最中、子どもたちは自分の将来をどのよう方向づけるのだろうか。(岩手大学)

なぜ「みんなといっしょ」なのか

——望ましい幼児教育への問い——



伊藤 隆二

いじめられっ子——なぜならば

日本人論が盛んである。外国人のみならず、日本人による日本人論も、少なからずある。いろいろな人が日本人を語っていくと、さまざまな角度からアプローチしているにもかかわらず、最後には、日本人は、単一民族だ

から、ものの見方も考え方も、また実際の行動も「二様である」という結論にゆきつく。

小さいときから、そんなことをしたらみっともないとか、そんなことをいったらわらわられるとか、ちゃんとしなければ変な子だといわれる、といったしつけをうけて育つ日本の子どもたちは、次第に人の目を気にするようになる。自分はみんなと同じことをしているか、みんな

と同じ見方をしているか、同じ考え方をしているか、と
いったことを心配するようになる。

仲間を見るときも、だれそれは変なことを言っている
とか、変な恰好をしているとか、変なクセがあるといっ
たことを問題にする。

自分がそうであるように、仲間にもみんなといっしょ
(同じ)であることを期待する。そして、少しでもみんな
と違うことをしていると、仲間はずれにしようとする。

そうした日本人の悪弊が、今、子どもの世界にも登場
し、「変った子ども」が苦しんでいる。「いじめられっ子」
と呼ばれている子どもたちである。

「いじめ」現象は、早い場合は三、四歳の幼児にもあ
らわれている。多いのは小・中学生時代である。そのこ
まかな実態について述べる余裕はないが、「いじめられ
っ子」になりやすい子どもには、いくつかの共通項があ
ることを指摘したい。「おとなしい」「覇気がない」「お
人好しである」「涙もろい」「気が弱い」「性格が暗い」
「動作が鈍い」「不器用である」「身体面に欠点がある(髪

の毛が縮れている、毛に色がついている、毛が薄い、か
らだが太っている、背が低い、体力がない、機能の面でも
不自由なところがある、何か病気があ、からだがか
い……)」「精神面に弱い面がある(知恵づきが遅い、頭
の回転がにぶい、言葉に問題がある——赤ちゃん言葉、
言葉遅れ、無口、どもり……、変ったクセがある)」「保
護者が貧しい、社会的地位(身分)が低い、社会的評判
がよくない」など。

もちろん、これらの項目が一人の子どもにすべてはま
るといふわけではない。ほんの数個が当てはまるだけで
あるということもある。また、項目によっては矛盾して
いるものもあるかもしれない。そうしたこまかな詮索
は、ここではやめるとして、全体を通して、どういふ子
どもかが想像できればそれでよいだろう。

一語で言えば、われわれが常識的にもっている「平均
的な」あるいは「標準的な」子どもから、下位の方へ逸
脱しているとき、「いじめ」の対象(いじめられっ子)に
なりやすいということである。

人の目を意識するということ

子どもは感受性が鋭いとか、ものごとに敏感だと、いわれている。そのことの真偽は問わないとしても、子どもの「いじめられっ子」を探し出す能力が、じつに確であるのには驚かされる。いじめっ子は自分よりも強いもの、あるいは「標準」より上位のものを見事に峻別し、決して手を出さない。怖いからでもあるし、面白くないからでもある。

では、かれらは自分より強いものや「標準」よりも上位にあるものを尊敬しているかというところ、そうでもない。自分はどうせかなわない、といった羨望もあるにはあるが、むしろはじめからかわりをもたないという場合が多いようだ。

では、子どもの「いじめられっ子」を探し出す能力は先天的なものかといえは、もちろんそうではない。子どもがあらかじめ、そういう能力をもって生まれてくると

は考えられない。

あとから身につけたものである。おとな（それは育ててくれた保護者であろうし、保育してくれた指導者でもあろう）がしていることを見ているうちに、意図することなく、学んでしまったものである。

子どもにかかりあうそのおとなたちが「平均」とか「標準」という目で他者を見、そして「平均」ないしは「標準」的な行動をすることに意を注ぎ、そして他者から「変な人間」とみられない行動を、実際にしてきたのである。そして仲間に少しでも「変った人間」がいると、軽蔑の目を注ぎ、また酒のサカナにして話の華を咲かせ、ときには除けものにしてきたのである。

こうしたおとなの意識や行動が「規範」となり、身近にいる小さな子どもに決定的な影響を及ぼしてきた、というのが私の考察である。

もう少し、こまかく見ていくと、こうである。今のおとながかつて子どもであったとき、親からは「一様である」ことを期待されていた。幼稚園でも小学校でも制服

を身にまとい、教師からは同じ教室で、同じように指導をうけ、人並みに学力をのぼし、人並みに上の学校にあらがっていった。上級学校では、その人なりに、ある程度は好きな勉強をしたのかもしれないが、同じように卒業し、人並みにサラリーマンかOLになったのだろう。入社したときは、みな頭髪を七分三分に分け、紺色の背広に白いワイシャツを着、赤いネクタイをしめていた。女性ならば流行の髪型にし、白いブラウスを着、紫色のスカートをはいていた。成人式や卒業式では、みな一樣に華やかな振り袖姿であった。男性は二七歳前後に、女性は二四歳前後に結婚することを望んだ。そして人並みのつれ合いを得、○○会館の型通りの結婚式をあげ、そして画一された（見ようによっては蜂の巣に似た）アパートの一室で新婚生活をおくり、子どもを平均二人、もうけたのである。やる気の旺盛な人の場合は栄達をめざして、がむしゃらに頑張つて人よりも早く昇進したのであるが、ほとんど大半は人並みに地位があがり、人並みに暮らせればそれでよいと、観念していた。そういう人は

「変った人間だ」と言われることをもつとも忌み嫌つた。「大過なし」がモットーであった。上司から指示されたことはするが、余計なこととはしない。着るものも、話すことばも、態度も平均的であることを望んだ。人から仲間はずれにされることをもつとも警戒した。そのためにはつき合いをよくした。人と変つたことをやるまいと、神経をつかった。自分の子どもたちには「みつともない」とか「人にわらわれるぞ」とたえず注意し、人の目を意識させる育て方をしていた……。

「標準」優先の幼児教育

一方、子どもをうけいれた保育園や幼稚園ではどうであったか。

最近、子どもの発達研究が非常に盛んである。子どもが生後何か月になったら何ができるようになる、何歳になったらこんなことをするようになる、といったことが「標準化」されるようになった。それによって「標準発

達検査」もつくられている。

育児書も氾濫している。そのどのページをひらいてみても「標準」が幅をきかせている。附録には「月別発達表」から、最近では「週別発達表」までついている。生後何か月の赤ちゃんは一日何回、どれだけのミルクを飲むか、体重はどうふえるか、日光浴は何時間やるべきか、風呂には何回入れるべきか、さらに離乳はいつ始めるか、そのときは何をどのくらい与えるべきか、排泄の習慣は何歳何か月から何か月の間にきちんとつけておかないと、あとでダメになる……といったことが微に入り細をうがって書かれている。

母親代わりに子どもを育てる役になっている保育園や幼稚園の保育・教諭たちはこうした「標準」にもとづいて子どもをしつけていくことになるだろう。そういうえば、いつの頃からか保育・教育の世界では、発達段階に応じた保育・教育とか、発達に即した保育・教育といった表現が多くとられるようになってきている。

発達研究が子どもの発達の「標準」を求めるものに収

斂していくとき、その結果にもとづいておこなわれる保育・教育は、子どもをも「標準」にはめこんでいくことは避けられない。

げんに保育園や幼稚園では、一定のカリキュラムを用意していることが多い。子どもの発達のすじ道はこうなのだから、それに即していつ何をどのように指導していくか、その結果はどうなるかといったことまであらかじめ、きちんときめておいて、どの子どももその固定した枠の中にはめこんでいく。

しかも、なお困ることに、昨今、世の中は「早いもの勝ち」という風潮がいたるところにゆきわたっているためか、保育園や幼稚園でも指導者は子どもたちに「早く、早く」を連発し、急がせている。

なぜそんなに急がせる必要があるのかというと、あらかじめきめられている型に、人よりも早くはまりこむと「勝利者」になれるという観念が指導者の頭の中にあるからにちがいない。小学校でも中学校でも、事態は深刻である。教師があらかじめ用意している答を早くあてる

ことのできる子どもが「よい子」であり、「勝利者」だと評価されるので、子ども同士はしのぎを削ることになる。

そこでも教師は「早く、早く」が口ぐせになっている。「よい子」とは標準通りか、標準を上まわる地点に早く到達したもののことである。逆に、のんびりとマイペースで、しかも標準とはちがった方向へ歩んでいく子どもがいると「変った子ども」だと非難されることになる。

指導者たちはそんなことをしていると「勝利者」になれないといつて、叱る。仲間たちは、「いじめ」甲斐がある、とみる。とくにグループ単位で「競争」をしている場合は、グループのメンバーが、その「変った子ども」を除けものにしようとする。その子どものために自分たちのグループが勝てないからである。

人生は選択の連続である

人間とは何か。人間が他の生きものどちがう点は数多

くあるだろうが、その一つはひとりひとりが独自のという点である。他の生きものは、蝶であれ蟻であれ、犬や猫であっても、そのもつて生まれた本能ないしは反射機構に、ほとんど完全に拘束されている。一定の刺激が与えられれば直ちに一定の反応をする、というように刺激・反応の関係は一樣である。つまり型通りである。したがって、その生きものの一匹一匹に大きなちがいがない。

しかし、人間は新生児や乳児の早い時期には刺激・反応の関係は固定的ではあるが、少し長すぎると、刺激・反応との間、その反応の仕方、また自発的な刺激の探究、刺激そのものの創造……といった点でその子らしさ（独自性）がみられるようになってくる。とくに幼児期にもなれば、刺激（人間の場合は問い）への応じ方（応答、活動）には、それぞれの子どものユニークさが目立つようになる。もつともユニークな子どもは、問いと答えの間（ま）が潤沢である。

他の生きものは刺激・反応の関係は短絡的であり、か

つ一直線につながっていて、固定的であるが、人間の場合は、問いを咀嚼し、吟味し、自分であれこれと思考し、そして最後に選択して、応答する。その選択するところに人間としての価値があるのであり、またその選択の仕方にもその人らしさが反映する。さらに選択するという自発的・主体的な行為を通して自己が創造されていく。当然、迷うこともある。悩むこともある。また選択したことが失敗である場合もある。そうした迷いや悩みや失敗することが人間だけのものなのである。そういう悲哀を経験することで人間は自己の人生をきりひらいていけるのである。

人間の歴史は、さらに敷衍すれば、アミーバから人類までの進化とは、選択した知恵が連綿と継承されつつ蓄積され、そして現代人の頭脳形成のもとになっていった、その過程であったといえる。今人間がさまざまな問いに直面し、正しい答えを選択していけるのは、気の遠くなるような過去の知恵の蓄積があったからである。

そうであるならば、人間の子どももさまざまに思考

し、発想し、そして自由に選択していくところに大きな意味をもつとはいえないだろうか。

おとな——子どもからみれば一世代古い人間——があらかじめきめた標準に、みずみずしい頭脳をもっている子どもたちをはめこんでいくだけならば、もはや進歩はない。それどころか一定の問いにたいして、早く一定の答えを（反射的に）出せるような指導を強いているならば、人間の子どもは蝶や蟻のレベルに退化していくだろう。なぜなら子どもは問いを咀嚼し、吟味し、自分であれこれと思考し、選択するという余裕もなく、あの「刺激・反応」という固定した、型通りの行動しかできなくなるからである。

望ましい幼児教育への問い

幼児の絵本を見て、驚くことがある。さまざまなの、例えば果物とか、身近な動物とかの絵が描かれている、そのページの隅に「このなから、なかまはずれ

をさがしましょう」と書かれているのである。

なるほどよくみると、それらのものなかで異質のものが一つか二つまじっている。果物のなかに大根がはいっていたり、茄子がはいっていたりする。「果物」という概念を学習させることが目的であるのだから、子どもたちに大根や茄子はちがうことに気づかせるのは、何もわるいことではない。しかし、「なかまはずれ」という表現はどうもただけない。

男の子が九人、女の子が一人いる集団をさして指導者が子どもに「このなかからなかまはずれをさがしましょう」と問うだろうか。もし問われた子どもがその女の子を指したならば、事態はどうなるだろうか。人間差別もはなはだしいということで、指導者も子どもも糾弾されるのではなからうか。

しかし、現実では、それに類似した差別が横行しているのである。ある幼稚園に自閉傾向のある子どもが入園してきたことがあった。その幼稚園ではグループ別保育をやっていたのであるが、どのグループの子どもも、そ

の障害児を仲間に入れなかったのだ。彼は仲間はずれにされたのである。

同じ子どもであるのに、動作がのろいとか、言葉で表現する力が弱いということ、その子どもは「変った子ども」というレッテルを貼られて、仲間から追放されるというのは、現代版の魔女狩りではないか。

「変った子ども」が仲間はずれにされるのは可哀相だという理由で、指導者は何があんでも「標準」に近づけようとして、子どもに無理な訓練をおこなうことが多い。しかし、所詮その「標準」通りにはならない。その子どもにはその子どもの生き方があるのだから。その独自性を尊重することが真の子どもも尊重なのである。

しかし、みんなと変っているところがあるというだけで仲間はずれにし、ときには「いじめ」の対象とする——そういう今の子どもたちの世界のおかしさを多くのおとなは、それほど重大視していないようだ。それはおとなの世界でも、同じようなことが数多くあるからだろう。それどころか、わが子に「みんなと同じようにしなさい」

と命令している親たちの心のうちには、もしみんなついていけなかったり、みんなとちがうことをやったならば仲間はずれにされてしまうという懸念がつきまといるのである。

わが子が人並みに上の学校を出、サラリーマンやOLになり、早く結婚し……というのを願っている親のもとで、じつは確実にその子どもの独自性は抹殺されているのである。子どもは何のために、この世に生を享けたのか、自分の役割は何かといった根源的な問いに立ちむかうことがない。したがって、人類の理想も描けない。独自性という天分を捨てて、「みんな」という標準に自分をはめこもうとするだけだ。

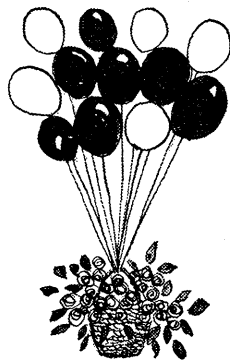
その行動は現実的・実利的である。「刺激・反応」のワン・パターンで、ただただあくせくと自分だけのために生きていくだけである。

そういう標準型サラリーマン・OLの養成を早くも保育園や幼稚園がうけおっている。

なぜ「みんなといっしょ」でなければならぬのか

——私はこの問いを幼児教育関係者に投げかけた。どうぞじっくりと問（ま）をとり、咀嚼し、吟味し、思考し、そして正しい答えを選択していただきたい。

（横浜市立大学）



韓国幼稚園教育 (一)

— 創立期の特性 —



李 相 琴

はじめは韓国の幼児教育全般にかけて書くつもりであったが、その量や内容をこなすには、いま私がおかれている状況では無理なことだと思ひ、今回は幼稚園教育に限定することにした。そこで創立期から現在にいたる過程を三回にわけて (一) 創立期の特性 (二) 植民地時代の様相 (三) 戦後の動向 という副タイトルをつけ、韓国幼稚園教育の変遷を歴史的な流れにそって述べたいと思ふ。

1 幼稚園創立の背景

李朝時代の長い鎖国政策に終止符をうたせたのは一八七六年(明治九年)の江華条約(韓国修好条約)であった。中国や日本に比してもっともおおそく開国した韓国は新しい文物制度をとり入れるために諸外国の協力をまたなければならなかった。日本について一八八二年から、米・英・独・仏など諸外国とも修好条約を締結し近代化

の協力者としていわゆるお雇い外国人を迎い入れることになった。なかでも日本と清国は優勢であり、お互いに競合しつつ進出を争ったのである。しかし日清戦争で清国勢はしりぞき変ってロシア勢が台頭した。これも日露戦争によっておさめられたので日本は独歩的に強力な位置を確保することになる。

日韓併合は正式には一九一〇年からということになるがすでに一九〇五年に保護条約が結ばれ実質的な支配体勢に入っていた。これは政治や経済面だけでなく教育についてもついでに、人事権・財政権などは日本人の意のままになるように制度化されていった。このような政情の変化に危機意識を感じた韓国人は教育救国の念に燃え私立学校設立を急いだ。当時韓国の私立各種学校は、その設立者が韓国人・日本人・西洋人と多様であり、設立も廃止も任意で学部（文部省にあたる）は関知する所がなかった。開国当初から政治各方面に参加してきた日本人としてはこの現象を学政上の一大欠点とみている。

韓国の私立学校設立による教育熱がもっとも上昇した

のは一九〇五―六年とみられる。一例をとれば平安北道では一郡内に百を越える私立学校が創設された。もちろん有形無実なものがあったことであろうが、当時の韓国人の心情を察するに適例であろう。これに対し政府は私立学校の統制をはかり一九〇八年（明治四十一年）私立学校令を發布した。一九一〇年以後、いわゆる日韓併合後は私立学校を規制する法令は改訂を重ねその統制が強化されたのは言うに及ばぬことである。

さて、このような情況と幼稚園教育がどんな関係に立つのかを説明しよう。前記の私立学校令と前後して各種の教育令が發布されることになり、高等女学校令も制定された。その高等女学校令に附属幼稚園設立に関する項目が含まれている。すなわち「高等女学校に附属幼稚園を設立することができる」と規定されたのである。なお官立漢城高等女学校学則として幼稚園教育の施行規則が次のように決められた。

一、本校に附属幼稚園を設置する

一、幼児の年令は満四才より普通学校に入学するまでと

する

一、幼児の定員は八十人にする

一、保育の項目は遊戯、唱歌、談話及手技とする

一、保育日数は一日五時間以内とする

一、保母一人が保育する幼児数は四十人以下とする

一、保育料は徴収しない

一、休業日及入園退園する節次は本校規程を準用する

この官立漢城高女学校は一九〇八年四月一日開校されたが附属幼稚園が開設されるのは、数年後となり、それも上記学則と一致するものではない。(後記、日本系幼稚園)

ともかく高等女学校令の制定により公私立の附属幼稚園を設置し得る法的根拠が一九〇八年にはじめて制立されたのである。法令発布以前日本人幼稚園はすでに創立されており、韓国人幼稚園はずっとたちおくれる。今回、創立期の特性(一)では韓国に幼稚園教育が導入された初期の各特性ある最初の幼稚園をとりあげて説明をすすめることにする。

2 最初の幼稚園

韓国の地に幼稚園という形態の教育機関が創立されたのは一八九七年(明治三〇年)のことであり、日本人が日本人子弟のために開設したものであった。この最初の幼稚園は釜山の 大谷派本願寺別院内に私立として発足した。

当時、韓国の日本人居留民はまさに激増しつつあった。当然のこととして港を中心に居留民は集団化していった。日本人居留民の大きなやみは子女教育問題であり、小学生教育も寺小屋式組織で行はれていた。その時期に居留民たちは幼稚園設置を要望しているのである。

明治三〇年といえば日本国内においても全国四十六の都道府県に最初の幼稚園を開設したところが約半数にいたる時期である。海外進出日本人の教育熱が高かったとみられるのである。しかし居留民の希望とはいえ自治体の財政に余裕がなく苦心していた折、釜山所在の大谷派本願寺釜山別院輪番である管原磧城氏の尽力により開設で

きるようになった。本山の補助ならびに領事と居留民総代の援助をうけ一八九七年（明治三〇年）三月三日私立釜山幼稚園は創立された。

創立当初は北浜通信部の家屋を併用して幼稚園々舎としたが同年五月東本願寺内に移転した。園児は最初二十余名にすぎなかったがその後順調に園勢が拡張し百二十名の定員を上廻る志願者が集まってきた。一九一四年（大正三年）居留民団の廃止により補助源がなくなったがこの私立釜山幼稚園は終戦の時期まで存続した。

韓国に幼稚園という教育機関を導入したのは日本人であり、日本人子弟のためのものであった。最初の幼稚園となった釜山幼稚園はその背景が寺院であったこともひとつの特性であり、その後の韓国内日本人幼稚園も寺院設立が多かった。

3 最初の公立幼稚園

一九〇〇年（明治三十三年）にはソウルと仁川に記念幼稚園が設立された。この両幼稚園は東宮殿下御成婚の

奉祝記念として各居留民団で有志らの寄附により開設されたものである。

ソウルでは庚子記念京城幼稚園として南山本願寺の一部を借り園舎に使用した。一九一四年学校組合に移管され一九二二年に庚子記念京城公立幼稚園と改称され、また園舎も新築した。この幼稚園の教育対象はもちろん日本人子弟のみであった。

仁川記念幼稚園は一九一二年に居留民団廃止と同時に学校組合立となり公立幼稚園になった。幼稚園教育の趣旨として「幼児に適當なる保育を施して心身の健全なる発達を遂げしめ善良なる習慣を養い家庭教育を補うにあり、保育の項目は遊戯、唱歌・觀察・読話・図画・手技とす」とのべている。この趣旨は創立当初のものではなく一九三〇年（昭和五年）刊行の朝鮮教育大観に記録されたので保育項目に觀察が含まれているものと思う。

以上、二園はそれぞれソウルと仁川に開設された最初の幼稚園であり、その後公立化されることにより最初の公立幼稚園となる。しかし両国とも日本人子弟のための

幼稚園であった。したがって韓国幼稚園史では幼稚園前史としての意義のみを認めている。

4 日本系幼稚園

いよいよ韓国子弟のための幼稚園が設立されることになった。一九一三年（大正二年）に開園した京城幼稚園がそれである。京城幼稚園の創立委員は百名以上に及び歴史とした名単をみることができる。時の中枢院参議をはじめとし京城府尹等政界著名人士また財界実業家の有名実力家たちである。日韓併合から間もなくこれら委員は親日派一色であった。

また幼稚園入園資格を創立委員子弟に限定し自ら貴族幼稚園化し、入園費、保育料もひじょうに高価であったため一般韓国人とは縁遠いものであった。修了式には大臣や高官等が参席し特権階級専有の幼稚園であった。

保母は日本人を採用し保育内容は日本の風習と習慣を教えることと日本語教育に重点をおいたため本来の幼稚園教育とも距離が遠かった。

当時の保母は京口さだ子といい『婦人と子ども』第17巻に二回にわたり「朝鮮幼児保育苦心談」をくわしくつたえている。

倉橋惣三先生は一九一六年（大正五年）夏、ソウルを尋ねていられ、その時のようすを簡略に『婦人と子ども』第16巻にのべている。そのなかに京城幼稚園の京口さだ子と前記した庚子記念京城幼稚園の大和田りようが熱心に保育にはげんでいたと言及され、この両幼稚園以外にソウルに幼稚園はなかったとある。これは日本人が関与した幼稚園がなかったとの意味で理解するよりほかない。なぜならば韓国子弟のための幼稚園がすでにソウルで開園されていたからである。

この京城幼稚園は創立当時官立京城高等女学校構内に設立され女学校の校長が名誉園長を兼ねていた。これは一九〇八年に発布された高等女学校令と官立漢城高等女学校学則によったものである。（漢城が京城と改称された）しかし借家住いは長くなく翌年園舎を新築している。

京城幼稚園は人的構成員が創立者は親日人士、保姆は日本人、保育内容は日本人化指向ということで日本系の幼稚園と指摘され、やはり韓国幼稚園史の正史からは除外される。

5 キリスト教系幼稚園

一八八二年、日本について西洋諸国との修好条約が締結されるや、あいついでキリスト教宣教師が到来した。

布教手段として医療事業と教育事業に集中したのはどの教派とも共通な特性であった。開国したばかりの韓国に近代教育を導入したのはこの宣教師たちであった。韓国の最初の女子教育機関として発足した梨花学堂も、一八八六年（明治十九年）米国からきた北メソジスト派の女宣教師による創立である。現在梨花女子大学校という世界一規模の大きい女子大学に発展している。

一九一四年（大正三年）梨花学堂に幼稚園が附設された。米国オハイオ州シンシナチで幼児教育を専攻したアメリカ人女性によって指導された。これに先だって一九

一三年に広島府のメソジスト系学校出身のタシマという日本人保姆がきて幼稚園をひらき指導したが、健康のため休園になっていたという。

梨花幼稚園は韓国人子弟のための教育機関であった。また貴族でない一般家庭の子どもがいただける幼稚園でもあった。最初十六名の園児があつまつた。若くて美しいアメリカ人教師は明るくたのしく保育をしたがいろいろな難関にぶつかった。その頃、西欧人を洋鬼といつて忌避する傾向があつたためへんなうわさがとび困惑した。「洋鬼が幼児の目玉を抜いて薬にするそうだ」というのである。もちろんこんなうわさは宣教師たちの誠意によつてなくなつたが、その次は保育に対する不信であつた。「学校とか教育といえは勉強するものなのにあの幼稚園ではちつとも教えないで遊ばしてばかりいる」という不満であつた。

ブラウンリという女教師は「母親会（マザーズミーティング）」をとおして母親教育を併行させた。ミス・ブラウンリは教材のほんやくにも努力し数多くの業績をの

こしている。その後米國留学を終えた韓國人教師達によつて梨花幼稚園はたゆみなく發展しつづけた。

キリスト教系幼稚園として最初である梨花幼稚園は實質的に韓國幼稚園の開拓者であり先導者でもあった。といふのは終戦前はもちろんごく最近まで韓國の幼稚園は私立幼稚園しかなくその私立幼稚園の七十五%がキリスト教系幼稚園であつた。そして幼稚園開設とほとんど同時に教師養成をはじめた梨花からは韓國幼兒教育界に多くの指導者、専門家を輩出したからである。

6 民族系幼稚園

韓國人が韓國人のために幼稚園を創立する日がようやくきた。一九一六年（大正五年）のことである。当時、Y M C A 幹事であり後に独立運動（一九一九年三月一日万才運動）主導者人のひとりである朴照道氏が韓國人有志によびかけた。すなわち「三十万人の朝鮮人が住んでいるソウルに朝鮮人が経営する幼稚園がひとつもないといふことは民族的恥である」と主張し、多くの愛國的同志をあつめた。そして開園されたのが中央幼稚園であり今日の総合大学中央大学の母体になつた。

しかし創立者は韓國人であつたとはいえ、幼稚園々長は梨花幼稚園々長であるミス・フライがあたり、幼稚園運営は梨花幼稚園のミス・ブラウンリがうけもつた。しぜん保育内容は梨花幼稚園と同一のものであつた。

ここで特記することは中央幼稚園の創立精神もしくは目的である。「將來の朝鮮をになうたためによく働きよくたたかう勇士を養成する機関を創立し國民の前途を開くことを目的とする。興味ある方法、やさしい教育課程、あたたかい愛情で園児を指導し、規則的な幼稚園生活とおして園児達を健全な社会人に養成しようとするものである」とのべている。挑戦的でもありひじょうに強烈な民族意識をあらわしたものと見える。中央幼稚園は民族教育の道場として幼稚園からの教育を含めていふことにその特性をみることが出来る。この精神は終戦まで続く韓國学校教育の抗日思想とつながるものである。

〔筆者は、韓國梨花女子大学教授〕

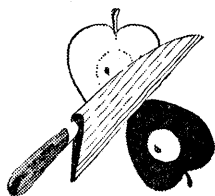
幼がたり

流れと雑魚

幼い日々の家庭環境

既載の方々の生来の素質の良さに加えてすぐれた環境で幼児期を過ぎたのに対し、魯鈍に生まれ雑駁な育ち方をした私の幼児期を記すことは逡巡されましたが、日露戦争の戦勝国として漸く世界の一等国に進出し、男子は立身出世することを本懐とし、驕慢の風潮が流れはじめた明治末期から、やがて大正デモクラシーが台頭しかけた時代に、庶民の子として多かれ少なかれ時代の影

川崎 千束



響もうけて育った幼児期を記すのもあながち無駄のみでもないと思われ、恥知らずのペンを執った次第です。

三重県庁の所在地であり旧くは藤堂三五万石の城下町でもあった津市の丸の内本町に生まれ、父は私の出生時は、県会議員・新聞社社長・商工会会長・蘭問屋主人と多様な肩書を持っており、職業柄使用人は多く出入りの人人も賑やかで常時ゴタゴタしている上に、七人兄弟の大家内でした。食事時は、最初子ども達、次は店の使用人、最後が台所の人達と三段階に分れていました。母は



▲晩年の父

父の不在の時は子どもと共に食卓を囲みましたが、多くは父の給仕をしながら腰高の膳で父と共に食事をしていて、私達子どもは父と食事を共にするのは正月や祭礼以外にはなかったようです。以上の環境だけでも野育ちになり勝ちなのに、独りの姉は私の四歳頃に嫁ぎましたから男兄弟の中で三輪車竹馬風上げの助手として屋根登りなど得意になり、屋根に登り損じて接骨院通いもしました。姉は母に似て容姿端正でしとやかで女学校の絵葉書になった程でしたが、私は父親似の不器量で外見は似も

つかぬ姉妹でした。

ある時父に連れられて県の華やいた会に出席した場で「こちらの嬢ちゃんはお父様似ですな」と言われ、ものかなしくなって袴の紐を噛んでいたのでしょう。会から帰るなり父は母に向かって「袴の紐ばかり噛んでいてみつともなかった」と告げましたが、その素因が父にあったとは知るよしもなかったでしょう。

父は肩書の多さが示すように野望家であり派手好きでもあったようで、毎年年の瀬になるとどの家よりも大きい門松が立てられ、相撲巡業が津市で催されると太刀山という横綱が挨拶にきました。祭の日には店の連子を取払い金屏風の前に座って踊り屋台を見物し、屋台衆も家の前で一段と鼓や撥の音を沓えさせて山車を曳いて行きました。又ある日は岩田川に納涼船を浮かべジンタのよいうな音楽を流して新聞の読者を招待したりして私たち兄妹はその船上ではしゃぎまわりました。

私が運動やさんと呼んだ人達が七八人居て父が衆議院選挙に出馬するのを応援する人達でした。父は落選しま

した。その因は複雑でしょうが、母は築港問題を四日市市を推す人と争ったからだと後になって話してくれましたが、四日市市は名古屋市に近く港を築くの適地であると誰しも考えるのに、勝目のない政策を何故父が主張したのかと、そんな父の血が私にも流れているようで反省する時があります。父の落選のおかげで津市は現在も三重県下の文教の都として脈打っています。

父の悪口を使用人の口から耳にすることはあっても母のことは口を揃えてその徳を褒め祖母へ尽した孝養は語り草になっています。私の幼い頃祖母は臥床ながらまだ生きていて、二階の奥座敷に朝の挨拶に向うのが日課になっていました。私は祖母の寝姿が気味悪く、たいていは襖の外から声をかけるようにしていましたが、時たま呼びとめられるとせん方なく室に入り「お早ようございます」と両手をついて挨拶しました。すると瘦せた手をさしのべて「おたからじゃのう」と頭を撫でてくれました。そんな日は大役を果たしたように階段をかけ降りたものですが、今の私と同じ位の年齢であつたらうに申し訳

ない事をしたと悔まれます。

母が誰よりも心を痛めたのは幼い日の私の言動でした。「お前は強情で不可ない。その強情さを矯さない限り、生涯の不仕合せになる」と言い言いました。私は強情の真の意味が理解できず、小学生になってから辞書で調べてなるほどと合点しました。一度繭の乾燥室に入れられたことがあります。乾燥室というのは繭の中の蛹が蛾にならぬように乾燥してしまふ室であつて、繭の最盛期には信州あたりから客達が泊りこみで買付けに来て買った繭を乾燥して持ち帰るのでした。

乾燥室内は熱くて暗くて繭の臭味がたまらなく泣き声も立てられぬ程でした。おそらく三分とは経っていなかったでしょう。母は無言で戸を開けてくれ私も亦無言で出て来ました。「男の子たちをこんな乾燥室へ入れたことはないのに、女の子のお前を入れるとは」と嘆いた母の言葉は今も耳朶にあるのに、何故乾燥室入りになったのかはすっかり忘れてしまいました。思い当るのは、当時広い店には電燈ばかりでなく瓦斯燈もいくつかついて

いました。その光を出すホヤを指で触ると脆く崩れるのが面白く、椅子に乗ってまでも禁を破って崩してまわり快哉としたのがみつかつたのかも知れません。

強情々々と言われても、私なりの理由がありそれを表現できない心奥のモヤモヤが方向違いに爆発し、泣き止まなかつたりすると、疳の虫が起きたと奇應丸などを飲まされたものでした。父は職業柄しばしば上京し、その都度土産を買って来てくれましたが、私が案外喜ばないのを、張合いのない子、妙なところがあると評しました。が、当時流行のカチューシャのリボンや幼い目にも高価に映るアストラカンのマントや爪皮のついた草履など、普通と異うものを身につけるのが気恥しく、母はこの見目麗しくない娘をせめて人並にと思うのと、父の私への暖い気持を素直に受入れさせてそれらの物を身につけさせようとするのですが、その父母の情がわかりながら私は強く拒みました。それでいて琴の会などに出演する時などは同じ年齢の子の服装を素早く見て取って、自分の衣裳の柄の良さを誇らしく感じました。この複雑摩訶な

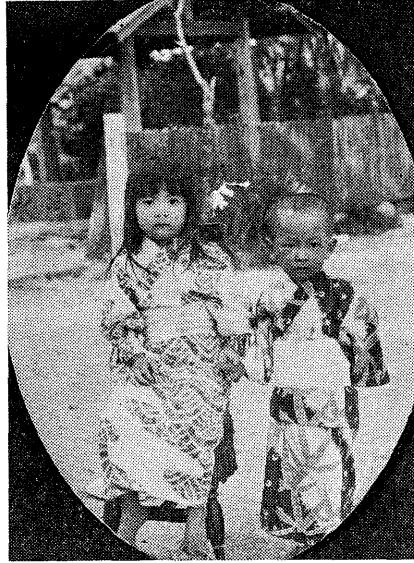
心理を我ながら解しかねます。

母は多忙な上に家が広かつた為、起床から寝に就くまで出会わない日もありましたが、ひねくれ娘の心を少しでも柔げたいと願つたのでしょう多忙の中で羽子板の押し絵や、海老や鯉を縮緬の布で本物そっくりに作つてくれたりしました。夜は必ず私と弟との為に添寝しながらイソップのような話やいろいろなお伽噺をきかせてくれましたが、私は浦島太郎的なものより北伊勢に伝わる柳田国男の遠野物語のような怖い話が好きで繰返しせがんだものでした。怖い話が好きとは反対にいろは歌^{歌留多}は好きでなく、何故亭主は赤烏帽子が好きなのか、かつたいは何を恨んでいるのやら、さっぱり判らず、それより姉や兄の友達が大量集つて賑やかな百人一首の方が雰囲気的にも好ましく、次の三首は膝の下に敷くような卑怯なことをしなくても必ず取ることができて、姉と組んでミソッカスの一役を果すことができました。

。紀友則 ひさかたの光のどけき春の日に……………

。藤原実方 かくとだにえやはいぶぎのさしも草……………

。藤原定家　こぬ人をまつ帆の浦の夕なぎに……
これらの恋歌の意味が判らう筈もないながら語呂の良
さにひかれたのでしよう。



▲藤堂高虎を祀った高山神社の
境内で、弟と。

弟には乳母が付いていて晴れた日には私も連れて観音
様へよく遊びに出かけ、境内の小さい池で亀たちが甲羅
を干しているのを興深く眺めました。観音堂の中に「お
びんづる」という座像の仏様が色褪せたよだれかけなど
してまつられていて、弟が風邪っ気の時乳母が、おびん
づるを撫でまわした手で弟の身体中を撫でさするのが汚

らしくて我慢ならず、「止めて！」と強引に止めさせま
した。爾来乳母も私を強情とし、弟は素直と弟ばかりを
褒めるようになりました。そんな乳母にオメオメと付い
て観音様行を続けたのは境内で売っているみたらし団子
の味の魅力からでした。

然し家の前に煙管掃除のラオ屋の小父さんの来る日
は、掃除の手順を見るのが面白く、乳母に付いて行かず
小父さんを待ち仲よしになって煙管に湯気をあてるのを
手伝わせてもらったりしました。観音様の年に一度のお
会式は盛大で、現在の夜店の集大成のようなもので、数
多くの見せものが出て、のぞきからくりの不如帰の口上
などを真似てみたり一度猿芝居も見ました。

出しものは阿波の鳴戸でしたが、お弓とおつるの悲し
みの場面も猿が演じると面白さに変わりました。観音境内
に近く一流の芝居小屋があり、松旭斎天勝の一行が奇術
を交えて、七匹の小山羊を演じたのを観た時、世にこん
なに楽しく美しいものがあるかとすっかり魅せられ天
勝にあこがれました。

姉の嫁入りの行列を狐の嫁入りの絵のようだと思送り、その行列が視野から遠のいたとき身辺から華ぐものがうたかたのように消去っていくのを四歳の私は感じました。

その後、幼稚園生活が始まりました。

幼稚園の落ちこぼれ

当時、津市には二つの幼稚園があり、一つはキリスト



▲姉



▲姉の嫁入り道具の行列。先頭は一番々頭。青竹の杖は嫁家についたら折って帰る。

教主義で創立され、私はもう一つの丸の内幼稚園に入園しました。兄達二人もこの園の卒業生ですから、多分日露の戦争に戦勝した頃設立されたのでしょう。(現在は廃園)

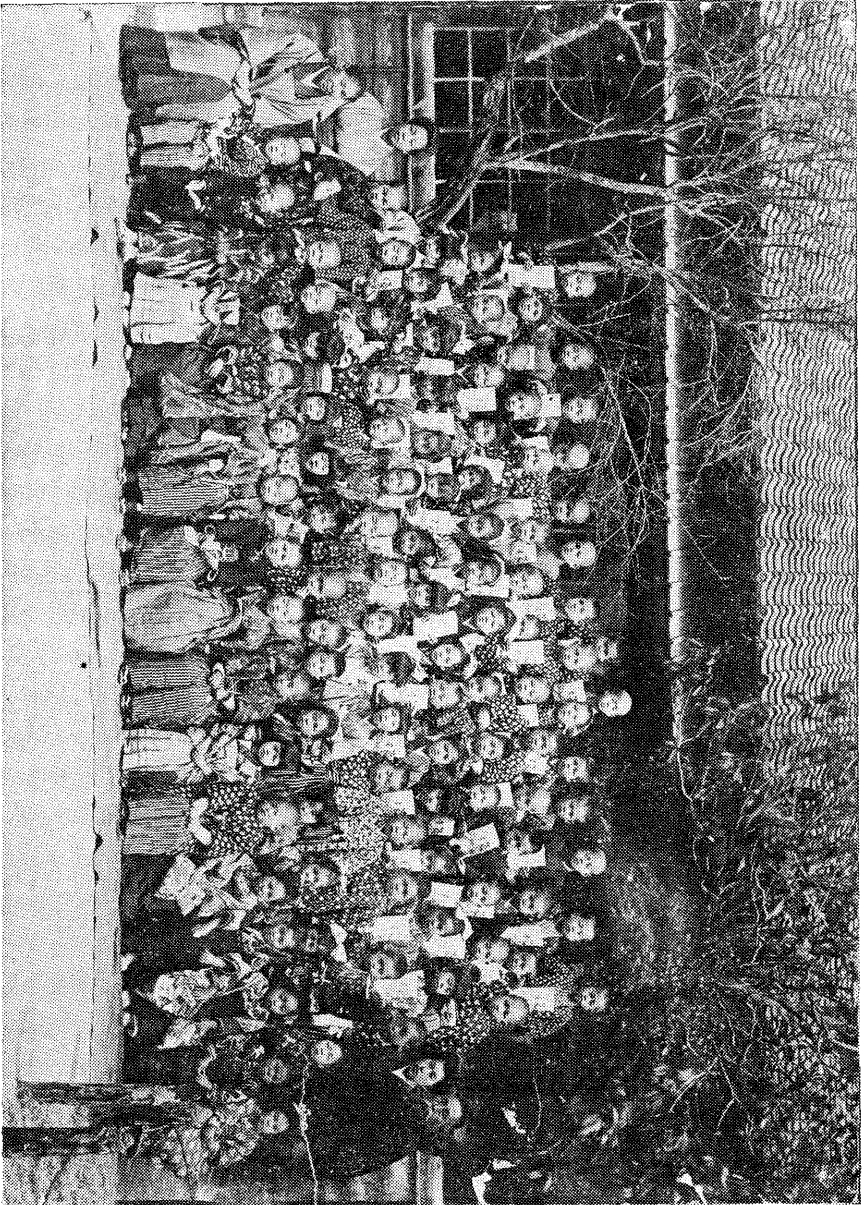
黒い冠木門を入ると大きな築山があり、築山の周囲が通園路で、保育室は二つ、ホールが一室で、私の生家の四分の一ほどの建坪だったと記憶に残っているので、普通の邸宅を幼稚園に改築されたのではないかと想像されます。卒業写真に依って数えたら百廿名ほどの園児数ですから、規模の小さい園だったのでしょう。常勤の先生が二人。他に切り下げ髪のお婆さん先生が時々顔を見せられ、もう一人、入卒の式には男の先生が出席されました。

家政大幼のお母さん達から「他の幼稚園に行っていたら落ちこぼれになるところでした」と、感謝めく言を耳にしますが、私自身幼稚園の落ちこぼれでしたから、幼い人たちの心に傷は残したくないと配慮したままでした。

私の幼稚園生活は、アルミニュームの円筒のお弁当入

れの蓋に先生が注いでくださる生温いお湯のように味気ないものでした。男兄弟の中で気ままに遊んでいた野性の子が、幼稚園という特種な枠の中で順応していくのは辛抱そのものでした。朝の会集に始まり登園から降園まで自由に遊べる時間はなく、次から次への仕事は今にして思えば、フレールルの恩物を消化するのみのカリキュラムであったようです。恩物の第三四五六は積木で、主として年嵩のU先生が担任され、この先生のキリリとしまった様子には親しみ難く「積木を出す時は箱を逆さにして音をさせないようにして蓋を静にとるよう」と言われると緊張してカタリツと音を立ててしまうのでした。積み上げる形も定っていて私にとっては恩物というより愚物的なものでした。又金属の細い棒と環を並べて、「月に叢雲」と教えられてもびったりせず窓外の雀の動きを見たりしていました。

私を尤も悩ませたのは織紙シヨウシと縫いとりでした。織紙は竹べらに細い色紙を挟んでそれを台紙に通して幾何的な模様を織っていくのですが最後の一本は通し難く、紙は



▲幼稚園の卒業写真 (筆者は上から四段目の左端)

伊予証が使われ伊予証は上手に仕上げると落着いた光沢があり出来栄えするのですが、現在の色紙に比べると弾力が少く、私がやっと最後の一本を通し終えても紙はしんなり萎えてしまつて情ない仕上りです。縫いとりは画用紙に下絵が描いてあり絵の線に穴があけてあつて木綿糸でアウトラインステッチのように縫つていくのです。

私が幼稚園に居残りをさせられたのは波に千鳥の絵の縫い通りの時でした。千鳥も青海波も曲線で描かれているのに糸を強く引っぱつたら穴と穴が共通して直線になつてしまい無惨なものとなりました。こぼれそうな涙を押えてとにかく再仕上げして許され、帰宅して母の膝に泣き伏しました。

それでも登園拒否もせず、翌朝登園して玄関で上草履と履きかえている時、二人の先生の会話が耳に入り私の事だと直感しました。

U先生「あの子の兄さん方はよく出来て素直な良い子でしたがねえ」

若いM先生「あの子もお行儀はよろしいですね」

私の心はU先生からますます遠のいていきました。私は三月生れで最年少であつたのに歴年齢は少しも考慮されていませんでした。

朝の会集の後で時々輪になつてまわり、

へ中の中のお子さんよ、あなたはどなたがお好きです。

お好きな方と代りましょう。さあさあこちらでさあこちら。

とうたつて、かごめかごめと同じ型の遊びをするのですが、かごめの歌詞はどこやらドラマチックで曲にも明るさがあるに引換え、二音程の単調な曲でした。運悪く円陣の中に入れられ「お好きな方と代りましょう」と言われても、好きな人がなく（二三人はいても既に円陣の中へ入り済み）うろたえるばかり。

さあさあとせかせかれてもますますもじもじするばかりでした。後年保育者になつて、かごめをする時、園生活に馴れない時期には名指しせず、うしろの正面だあれで交替するようにしました。これは落ちこぼれ体験者の配慮でしょう。

私の覚えたお正月のうたは、

へことしもいつしか年の暮、お正月には床飾り 滝廉太郎作曲のへもういくつ寝るとお正月…… の心弾むお正月のうたとは何と大違いな歌でしょう。このように子どもの心不在の歌ばかりでしたが一つだけ心に叶ったうたがありました。へべスべス立て立てお着やるぞ。お着やるから三べん廻れあれあれべスが廻るよ廻る面白いな可笑しいなへ

忘れられない出来事は、おさげ止めをSという子に二度も持ち去られたことです。Sという女兒が私を選んだのは、多分居残りさせられた愚鈍な組し易い子と思ったからでしょう。毎朝母が髪を結っていてくれました。Sが私の髪からおさげ止めを外して持ち去ろうとした時、「返して！」と呼びましたがニタリッと笑って返してくれず、翌朝母に見咎められ、「落した」と咄嗟に嘘を言いました。二度目の時は落したとは言えず持ち去られたことを白状しました。「何故返してと言えなかったのか」「嘘つきは悪い子」と大変叱られました。Sの名を告げ

た時、母はぶつり黙ってしまい、私の髪形をおかっぱにしました。Sは母の和裁の先生の孫だったとのことを後で知りました。幼稚園生活で受けたコンプレックスは私の心の中に長く尾を引きました。

私達兄弟は父と食事を共にすることは殆ど無かったと記しましたが、私は麻疹の後ジフテリアに罹りその後、時期が藪の出盛りで家中が埃っぽくなるからとの理由で、父と二人だけで阿漕ヶ浦の貸別荘で一ヶ月余を暮しました。食事は家からと近くの料理屋から運ばれました。父は落選の後で心身ともに疲労していたのでしょう。椅子に凭れて瞑目している時が多く、それでも私が磯遊びに出かける時は「帽子を」と手ずから帽子を冠せてくれました。私は晴れた日には、やどかりや小蟹を追いかけてたり雨の日は折紙をしたり錦絵風の江戸名所図絵を見たり、外国土産にもらった三匹の熊の絵本と茶褐色のボール紙で家や車が組立てられる玩具に興じて幼稚園通いより楽しい日々でしたが、夜になって、沖の漁火を眺めると悲しくなり海鳴りをきく夜は父の布団にもぐりこ

みました。そんなある日、兄が幼稚園から言託ったと七夕飾りを屈けてくれ大喜びしましたが、「どの先生？」
「U先生だよ」との兄の答えて、急に色紙が色褪せて見え翌日屑籠に捨てようとしたら父が「あんなに喜んだのに、まだ綺麗じゃないか」と飾り直したのを覚えています。
繭の最盛期が過ぎて私だけ家に帰ることになり迎えに来た母に「嬢は良い子だよ」と始めて褒めてくれました。

友だち

帰宅してからふとしたことで家の裏通りに住む年上の子たちと友達になりました。この人達の遊びがいきいきとしていて私は魅了ようになりました。冗漫になるので遊びの種類だけを記します。お手玉・おはじき・あやとり・うつけ絵・日光写真・輪まわし・ゴム縄とび・青竹で作る十二支・地面の陣とり・どんぐり遊びのいろいろ・花相撲・泥饅頭づくり・ことろことろなど。

ゴム毡の破れは自転車で修繕してくれることもこの友だちから教わりました。数名のこの友だちは勝手口か

ら「お嬢ちゃん」とひそやかに呼びに来てくれました。その頃琴を習っていたので爪箱を持って出て琴の稽古には行かず、この人達と遊び呆けました。若しこの人たちとめぐり会わなかったら私はいじけた子に育っていたことでしょう。私はたけくらべのみどりの存在ではなく、むしろ女兒の遊びを何も知らない私に、遊びを教えるという興味と満足がこの人たちにあったのだと思います。それと別棟に納屋があり百坪ほどの空地があつて、納屋に入れてある不用になった繭籠で珍妙な劇ごっこを演るのがこの人達の好奇心を満足させ、やまたのおろち・因幡の白兔・一寸法師・三匹の熊・アリババなどをやりました。

琴の稽古を母に内密で怠っているのは後めたく、たまに出かけた時に三回分位覚えればよいと自問自答して、出かけた日は一生懸命に覚えましたが、琴が嫌いではなく遊びたい心を押えて習う順番を正座して待つのがつらく正座が出来ないのでなく母に連れられて藤堂家のお能を拝見に行った時など、熊野の女面のやさしさ、紅葉狩

の鬼女に変わるすさまじさ、その幽玄さに魅せられて長時間正座していられました。待つのがつらいと言うより生き生きした遊びに陶酔していたのでしょう。

仲間の友だちが皆貰っているからとの理由で、兄達には使わせなつた小遣を私だけ毎日二銭ずつ貰いました。そのうれしさ。自由に使える二銭銅貨を握りしめその重みを宝物のように感じました。主におはじき・日光写真・ゴム酸漿・うつし絵などを買いました。

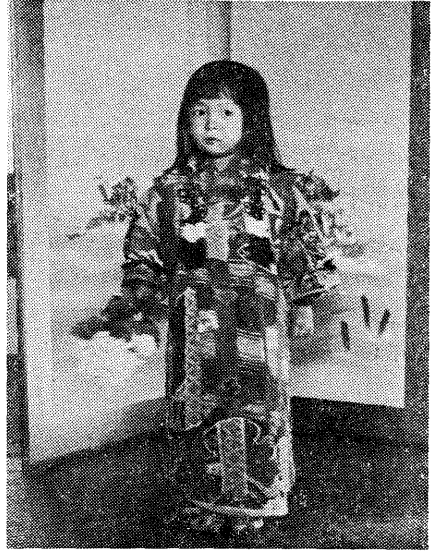
その頃夕方になると背の高い外人がロシアパンとパン売りに来ました。そのテノールの声の響きのよさにパンもきつと美味であるうにと思いましたが母は買わず、やがてその声もきかなくなりました。あれはロシアの捕虜だったと伝えききました。同じ頃十人ほどの子どもが並んで「お父さんには生き別れ、お母さんには死に別れ、頼りに思う院長さんは」と歌うように唱え、そのあと各家をまわつて品物を買うよう執拗に頼み母は銘筆など買ってしまいました。なぜ十人が同じ境遇なのか不思議でならず、母から孤児院の可哀そうな子供達と教えられても腑

に落ちませんでした。

明治四五年明治天皇崩御、ご大葬に参列する父に母と連れられ、皇居前広場で大勢の人が土下座して祈念している異様な光景、乃木大将夫妻殉死の号外の鈴の音、子ども心にも還りまさぬ御幸に用いられた牛車を拝観させていただき壮重の感に打たれました。

小学校低学年のころ

大正二年小学校入学。同年第一次世界大戦で独逸に勝つて青島陥落を祝い、店の若い衆は大きな船の模型を造り仮装行列に加り戦勝で湧きました。大正三年大正天皇御即位伊勢神宮にご参拝。姉の婚家が陛下ご柱簾の神宮司庁の隣りである為、御車が徐行し玉顔をよく拝することができました。翌大正四年父は亡くなり、母は四十歳そこそこで髪を切り茶筌髷にしましたが丸髷の時よりこの方が美しいと感じました。長兄は父の跡を継ぐ肌合でなく、よし器であったとしても生糸の輸出は横浜で滞貨し、又父の選挙の痛手で財政的に苦境に落入ったのでし



▲年長組のとき。袖口が絞られた改良袖。

よう本店も新聞社も整理して、郊外の工場傍にある管理人の住所だった処に移りました。陋屋ながら庭もあり庭は土手に続き土手の榎並木は涼風と緑蔭を恵んでくれ、工場の広い生糸乾し場には雑草が生い茂り土の匂いは心を平穩にしてくれました。

傍目には昨日に変わる今日の姿と哀れに映ったかも知れませんが、母と長兄私と弟お手伝さん一人と五人が住むには充分で、生涯で一番精神的にうち足りた生活が展開しました。母も亦寂しくはあっても、毎朝一番々頭が挨拶

拶に来訪、又新米が入ったから好物の鯉の上物が……と曾ての出入商人が旬のものを持参してくれ、髪結いも近所に来たからと世間話を齎してくれましたから、漁を終えた船が静かに入江で舫いているような平穩さだったでしょう。

三年生になった時、選挙によって級長に任命され、その後毎学期毎学年、二度副級長になっただけでずっと級長に選出されました。母は喜びましたが、この事に依り私の個性は退行して物事に対し、慎重にはなり逡巡忸怩するようになりました。一年生の時友達を工場用の鹽に乗せ漕ぎ出し戻れなくて二人で泣き出してしまったそんな野性味は消えました。大正七年米騒動が起り津市の米穀取引所は焼打され怖い思いを経験しました。

現在、幼保一元化・長時間保育と子どもの心を不在にして制度だけが先行するのなら私の幼児期を回想して大反対です。若し婦人層にアッピールする政策であるのなら尚のことです。

☆著者には、半生の自伝が収められた『さわらび』の御著書があります。——編集部註

しも

やけ



豊田一秀

出に残るものがあることに気がついた。

しもやけのあの痛痒さ、それである。しもやけもあかぎれも寒さのせいで起こる一つの症状であるが、しもやけが痛みだけではなく、痒みをも持ち合わせていたおかげで思い出の棚の中であかぎれよりも良い場所にいられるような気がする。

先日、悪友共と呑みながら、視、聴、触、嗅、味のいわゆる五感の中で何が一番思い出に強く訴えるかという話になった。脱脂粉乳こそが我が小学生時代の味だとか、ヒーターの入った山の手線のおいこそが東京の冬のおいだとか話しているうちに、アルコールのせいとか、あの映画音楽こそ我が悲恋の曲だ等とぐちる奴も出てきたりで楽しいひとときであった。しかし今回、しもやけについて考えながら、フッと五感以外にも強く思い

私のしもやけの思い出は、小学生時代が中心である。授業中、赤くむくんだような足の小指が無性に痒くなってきて、片方の足でふんずけているのだが、そのうちどうにも我慢ができなくなってきた靴下も脱いでポリポリかいていると先生に見つかって大目玉をくらった事。休み時間にダルマストーブにあたっているうち、手の先がもうれつに痒くなってきてどこまでストーブに手を近づけられるかという競争をして、熱さに耐えつつも良い気持であった事。またしもやけと風呂とは切っても切れない関係で、私が熱い風呂を好むようになったのも、このしもやけが原因

しているに違いない。特に洗面器に両足を入れ、だんだん熱いお湯を入れていく時のあの快感と苦痛、一種の自虐感……。今思い出してもゾクゾクしてしまう。

痛さは少しでも避けたい感覚であるが、痒さは、それと一味異っている。「痒み」——しもやけのみならず、

蚊にさされた時でも大抵はかかない方がよいと知りつつも、その誘惑に理性が負けてしまい、だめだ、だめだと言いつつもその刹那の快感に溺れてしまう、そして後に痛みと共に悔いを残す——こんな感覚である。その痒みと痛みが同居しているしもやけは、甘さと酸っぱさの同居している初恋とどこか似ている等と言ったら大勢の人々にあきれられてしまうだろうか。しもやけの方がはるかに即物的ではあるが、異ったものがお互いを明らかにしつつ同居している両者は、どちらもなつかしく心に残る存在である。

ところで最近東京では幼稚園でも、全くと言ってよいほど、なつかしいしもやけの手や足を見なくなってしまう。栄養がよくなってきたているせいなのだろうか、セ

ントラルヒーティングのせいなのだろうか、それとも公害で東京が暖冬になってきているせいなのだろうか、はたまた子ども達が戸外で遊ばなくなっているせいなのだろうか。

垣根の垣根のまがり角

焚火だ、焚火だ、落ち葉焚き

あたろうか、あたろうよ

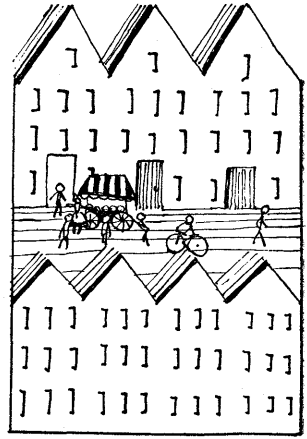
しもやけおててがもう痒い

(異聖歌—作詞 渡辺茂—作曲)

私の大好きなあの歌を、今の子ども達が一種の実感を持って歌えなくなってしまうのはなんともし寂しい。

「さて、明日あたり、子ども達を誘って押しくら饅頭でもしてやろうかな。」などとブツブツひとり言を言っている私である。

(お茶の水女子大学附属幼稚園)



管見・フランスの子どもの世界

— 規範のしつけの問題を中心に —

宮 島 喬

突き放した冷たさ

高校生の頃だったか、ジュール・ルナールの『にんじん』を読んだ。いま読み返すと、残酷さのなかの暗いイロニーにも大いに心惹かれるが、当時はそんなことよりも、「こんな家庭があつてなるものか」と、この呪われた少年への同情でいっぱいだった。著者の少年時代といわれるこの主人公は、父からは冷たく無視され、母の絶えざる叱責にさらされ、兄姉からはいつも嘲弄の対象とされ、自分をあたかも孤児のように感じる。いな、実の

親をもちながらこのような酷薄の世界におかれるくらいなら、いっそ本当の孤児であつたならばよいのに、とさえ、少年は思うであろう。いわゆる継子いじめと類似の主題のように感じられるところもあるが、ここでは父親さえも少年に冷たいのであり、物語の舞台はなに欠けるところのないブルジョワ家庭なのだ。いま思うに、ブルジョワ階級の興隆と共に子どもへの配慮、愛情を中心に置く家庭生活が生まれた、と説くフィリップ・アリエスの考察と、いったいどう重ね合わせてこの物語を読んだらよいのだろうか。

もうひとつ、フランスの子どもというと、心に浮かぶものがある。子どもの歌としてよく愛唱されるシャンソンに「月の光に」(Au clair de la lune) というのがあり、曲想は詩的で、透明でなかなか魅力に富んでいる。

ところが、あるとき歌詞の二番をきいてみて、おやっと思いの感を受けた。月の光の下にピエロが立っていて、家のなかの少年に語りかける、手紙を書くので君のペンを貸してくれないか、ろうそくが尽きてもう灯あかりもないんだ、神様のおぼし召しと思つてきみのドアを開けてくれたまえ。以上を承けて、二番はいう。

月の光の下にいる／友だちのピエロよ／ぼくはペンをもっていないし／もうベッドに入つてゐるんだ／お隣りに行つてくれたまえ／きつとだれかが起きてゐるよ／だつて台所で火打石の音がきこえるもの

この歌詞を解釈するなどという大それたことは、わたしにはできない。ただ、感ずるに、通常われわれのいなく子どもの歌の観念からすると、ピエロの懇願をそっ

けなくはねつけて「お隣りさんへ行つてくれ」という子どものことは異例である。子どもの世界は友情とか思いやりとかやさしさといった親和的な主題でえがかれるのがふつうだと思ひこんでゐる者には、この突き放した冷たさはどうも同化しにくい。と同時に、その冷たさは、西欧、そしてフランスという異文化のなかでの子どもの位置をなにかしら暗示しているように思えて、わたくしには興味が尽きないのである。

いきなりこんなことから書きだしたのも、じつはわたしの「偏見」をあらかじめ提示しておきたかつたからである。読んだり聞いたり、またこの国に実際に住んで経験したかぎりでは、フランスでは子どもが、特別に保護され、いたわられた、甘やかな、いわゆる「子どもの世界」のなかに包みこまれてはゐるのではないかと、という印象が強い。ことに日本とくらべてそう感ずる。そう感ずるにいたつたいくつかの経験はのちに紹介したいと思うが、『にんじん』はわたくしが初めて瞠目しつゝのぞいたこの国の少年の世界であり、月下のピエロのシ

ヤンソンは、親和的ならざる自一他関係が子ども文化の主第となりうるのか、というちょっとした驚きをあたえてくれたものである。では、フランスの子ども観のなかに流れているものは何なのだろうか。

「マテオ」の子殺し——許されざる行爲

右の「偏見」のみちびくところにしたがい、ふたたび文学作品を例にとれば、だいぶ古典となるが、プロスペル・メリメの「マテオ・ファルコーネ」が目止まる。

「マテオ」はほんの小さな短編で、コルシカ島を舞台として一組の父子のあいだに生じる悲劇を扱っている。

(なお、『コルシカ紀行』(中公新書) ほかで大岡昇平氏の展開している「マテオ」の主題の歴史的考察はたいへん興味ぶかいことを付記する。)官憲に追われている「おたすね者」をいったんは匿ってやった十歳の少年フォルチュナトは、やがてそこに現われる追手の隊長のちらつかせる銀時計について心をうごかされ、隠れ場所を教えずに、**「おたすね者」**は探しだされ、しよっぴかれて

いく。この事実を知った少年の父マテオは、信義をふみにじった恥ずべきわが子を、おのが手で射殺する。

「……マテオは鉄砲の撃鉄を揚げ、ねらいを定めながら、言った。

——神様に許してもらえ!

子供は起き上がって父の膝に抱きつこうと、必死の努力を試みた。が、間に合わなかった。マテオは引き金を引いた。フォルチュナトはぼったり倒れてことされた。

死骸の方は振り向きもせずに、マテオは家路をさして歩き出した。子供を埋めるために鋤を取りに行くのである。」(杉捷夫訳)

まさに悲劇中の悲劇である子殺しを、これほどに感情を殺した、乾いた簡潔なタッチでえがいた文章をわたくしは知らない。死をもってする裏切への制裁はこの島独特のふるくからの掟だ、といってしまうばそれまでであるが、それが十九世紀の作家によってとりあげられ、読者から感銘をもって読まれたとすれば、やはりそこには人びとに共有される、ある〈子どもへの眼〉が示され

ているとみてよいのではないか。

憲兵隊長のちらつかせる銀時計の魅力に心ゆくぶられ、抗しきれなくなるところに、十歳の少年の可愛げのある「子どもらしさ」をみてとる向きもある。日本だったら、「やはりそこは子どもだ」と、鷹揚にみるおとなの眼が支配的であるかもしれない。しかし、「マテオ」の眼はきびしい。いったん「おたずね者」を匿ってやると約束した以上、少年はすでに子どもの世界にはなく、大人たちの信義の世界にコミットしたことになる。この世界では、十歳の子ともであるがゆえに大目にみる、という特別のゆるしや酌量はあたえられない。自分の行為から結果した事態にたいしては、大人とおなじように責任を負わなければならないということなのだ。作家メモの筆も、その心のうちとはかく、フォルチュナトへの同情を微塵もあらわさず、他愛なく自分の欲望に敗けて大人の世界のモラルの厳しさに耐えることのできなかつたことゆえの悲劇として、少年の運命をえがいているといつてよい。

子どもが自分の欲望に敗け、その結果、慄然たる思いでみずからの行為の結果に向き合わなければならぬ、というシチュエーションの設定になる文学作品はほかに幾つもあるように思う。たとえばアルフォンス・ドーデの『月曜物語』（岩波文庫）のなかにおさめられた、これも短編の「少年間諜」というのがある。

パリがプロシヤ軍の包囲下にある普仏戦争のさなか、少年ステファーンは、プロシヤ軍に新聞を売りにいくと三十フランにもなる、と仲間の少年に教えられ、その誘惑にたいに抗しきれず、仲間と共に新聞を隠しもってパリの城門を抜けだす。首尾よくプロシヤ軍の陣営にたどりついた少年たちは、望みどおり銀貨を手に入れる。それのみか相棒の少年はパリの国民軍の出陣準備の報をプロシヤ軍に通じ、その報酬としてか袋いっぱい馬鈴薯をせしめる。家にもどったものの、後悔と不安にさいなまれたステファーンは、プロシヤ軍の所へ行って銀貨を手に入れたことの一部始終を白状する。これを知った、公園の番人をしている年老いた父親は、「よし、おれはこ

れを返してくる」と、少年から銀貨をとりあげ、銃をとり、ふりむきもせずに家をあとし、折から出陣行進中の一部隊に身を投じる。以来、その界限は二度とふたたびその老人の姿をみることはなかった、と小品はむすんでいる。

子ども——欠如態？

あらたまつて問うのもおかしいが、「子ども」とはいつたいなにか。なにであつたか。

「子ども」、「幼児」などを意味する infant とか enfant は、語源的にはラテン語の infans (話さない、無言の、訥弁の) ということばに由来している。言語の能力の欠如という意味であるが、さらにはロゴスの欠如といった意味もこめられていたにちがいない。おとなにくらべて不完全で未発達な、いわば欠如態であるという見方が、かつて子ども観の基調をなおしていたのだと思う。今世紀初頭の社会学者エミール・デュルケムなども、どちらかといえばこの見方の系列に立ち、「幼児期」

(enfance) というものを定義して「身体的、道徳的にいまだ未発達で、未形成であるような個人の成長の時期」と述べている。こうした考え方に對して、百八十度といわぬまでも力点の置き所がちがう子ども観が、ジャン・ジャック・ルソーによつて、また現代の心理学者や教育学者によつて唱えられていることは、周知の通りである。少し大げさにいうと、おとなの世界では疾うに失われているか、抑圧されてしまつてゐる無垢、善良、自然、感じやすさなどこそが、子どもの世界をなしている、とする見方である。しかし、この国の人びとの子ども観では、やはり「無垢なる子ども」のイメージは多数派とはいえないという印象をうける。といつて、單純に子ども性悪説というわけでもないが、不充分で不完全で、社会化を必要とする、要するに欠如態である、という見方がどうも基調をなしているように思えてならない。

フランスの町なかでよく見かけるひとつの光景を再現する。日本でいえばさしづめ東京駅にあたるパリのリヨン駅の巨大な構内で、「切符を買いに行つてくるから荷

物の番をしていなさい」といわれた八、九歳の少年が、「ひとりはいやだ、ほくも行きたい」と駄々をこね、けわしい形相の若い母親からパチンと平手打ちをくらっているのを見たことがある。その効あってか、少年はトラックのそばで半べそをかきながらもじっと数分間立ち番をしていた。往き交り乗客のなかでこの母親の平手打ちの光景に格別ふりかえる者もいなかったことは、それが日常茶飯の親子の情景であるからだろう。日本の若い母親ならばおそらく「仕方ないわねえ」とこぼしながら、重い荷物に子どもの手を引いて、切符の窓口に向かうことだろう。

「七歳になるまで子は神様」ということばが日本にはある。多義的なことばではあるが、これは、子は宝、さずかりもの、多少の腕白はむしろ元氣のよい証拠、やかましいこといわずにのびのびとふるまわせたほうがよい、という考え方につながっている。しかしフランスでは、自分の欲望を無拘束の自由のなかで押し通そうとする子どもの行動様式を「腕白」とか「やんちゃ」という

肯定的なひびきをもったことばで表現することはあまりないようだ。駄々っ子への母親のきびしい叱責の意味するのは、こういう子どもは自分の欲望を制することのできない、弱い、それだけにより多くの規律と訓練を要する存在だということではなからうか。

インパースナルな規範の習得を

ところで、子どもにたいしてどこされる社会化、あるいはしつけの特徴であるが、わたくしはつねづねフランス人のある特性に印象づけられてきた。平手打ちをくわせたり、お尻をぶったりと外目にはずいぶん手荒い制裁もくわえるようだが、そのねらいは規範の習得におかれています、親という社会化のエイジェントに個別に従順ならしめるということではないようだ。くだいていえば、親のしつけは、「文句をいわずにお母さん（お父さん）のいうことをききなさい」というかたちをとらずに、「～をすることをよくないことだから（～のきまりに反することだから）してはいけません」という仕方

行われることが多いように思う。インパースナルな規範の習得といったらよいだろうか。

著名な評論家アンドレ・シエグフリードはかつてフランス人を評してこう書いている。「フランス人は、自身によって考え判断することを求め、どんな官職のまへにも頭をさげない。それによってフランス人は、きわめて反公式主義者であり、反全体主義者である。フランス人が、思いきって批判精神のすべてを犠牲にしてまでも、熱狂的に盲目的に一つの命令にしたがうことがあるとしたら、それは、一つの原則、一つの組織、一つの政策に対する狂信的な献身からであり、ドイツ人にみられるように、服従の気質からではない」(福永英二訳『西欧の精神』)。「ドイツ人の服従的気質」云々はともかくとして、フランス人の精神というものがパースナルな人間関係への適応によりも、インパースナルな理念とか原則とか規範とかに志向するかたむきのあることは、わたくしの実感にてらしても肯定できる。かれらは、理屈ぬき、論理ぬきで人に従うことを好まないし、したがって

理屈ぬき、論理ぬきで人を服従させることも好まない。そのことが、子どもへのしつけの態度のなかにもつらぬかれてくるのではないかと思うのである。

じっさい、特定人格への服従をもとめるしつけと、規範の遵守をもとめるしつけという、二つのしつけの型の区別は重要である。たとえば、お菓子屋のショーウィンドーの前で「あれが欲しい」と言い張ってきかない子どもに対して、日本の母親のなかには「駄目です、どうしてお母さんのいうことがきけないの」とだけ叱る者がけっこう多いように思われるが、フランスの母親は少しちがう。「あれを買って」と言い張る子どもに、なぜ買ってやらないかを理づめでこんこんと説明し、さすとというのがよくみられる光景であり、年端もいかない子どもにはたして分るのかと思われるくらいに、理屈っぽい叱り方をする。そして、ことばで説明しても分らない小さい幼児については、お尻をたたいたりしても、かれらの欲望が容れられないことを教えるというわけである。

ここからふりかえれば、あの「マテオ」の悲劇も、イ

ンペースナルなひとつの規範に即して行動しえなかつた少年への制裁として解される。それは、ペースナルな熱い父子の情にも優先すべきものなのである。もちろん、作品にはなんらえがかれることのない父マテオの内面の激しい葛藤を讀者のおのが想像し、体験することによって悲劇の非劇性がいっそう強められるのだが。「少年間諜」の老いた父親の突然の従軍・出征が少年にもたらず残酷な教育も、こうした規範の教育にはかならない。

ちなみに、しつげとか子どもへの教育がもしこのようなものであるとすれば、愛憎の感情生活との区別は比較的容易となり、その混同はかなり避けられるのではない。いわゆる「感情的に叱る」という行為は、規範のしつげとは相容れないのであり、多くの親はそれとなくこのような区別の感覚をそなえているように思われる。しつげにきびしく、お尻をたたくことも辞さない母親が、同時に惜みなく愛情を表現し、子どもを抱きしめて接吻せぬにすぎぬ母親であることも可能なのである。しつげにきびしいからといって、子どもへの愛情表現を怠ることも

なく、また子どもを熱愛しているからといってしつげをおろそかにするわけでもない。少なくともわたくしの知っている範囲のフランス人の家庭では、こうしたけじめがはっきりつけられているらしいことがうかがわれる。食事のテーブルで母親が肉を取り分けて皿に入れてくれるとき、五、六歳の幼児がごく自然に「メルシー・ママ」と答える。夜の九時頃になると親は幼児を寝室に退らせるが、ここで駄々をこねる子はほとんどいない。だが、そのとき、親はかならず子どもに「おやすみ」の大きな接吻をあたえ、自分の愛情の表現とするのである。

考えてみれば、愛情表現を大切にすることとは、しつげを効果的ににおこなうための必要不可欠の条件なのかもしれない。たとえば九時就寝というきまり（規範）を守らせるために子どもを追い立て、従わなければきつく叱責する親は、反面、子ども憎しで叱っているのではないのだということを分らせなければならぬし、もしそれを伝えることができなければ、子どもはいたずらに不安や恐怖をいだくことになる。愛情関係に不安定さ

を感じている子どもにきびしいしつけはできないとすれば、まさに両者は補完関係に立つのではなからうか。

ひるがえって思うに、われわれ日本人は子ども可愛さからか、あえてきびしい規範のしつけをこころみず、子どもとのあいだに親和的關係が自然に保たれていると思っ
っているためか、それほど意識的に愛情表現を追求しようともしない。以前、フランスのある地方都市で三歳の長男を幼稚園に通わせていたころ、朝、幼稚園の玄関でわたくしや妻が手をふるだけで子どもと別れるのを見ていて、園長の婦人が「なぜ接吻をしてやらないのか、子どもが不安がらないか」とたずねてきたことがある。それ以来、仕方がないのでわたくしも妻も、接吻のまねごとのようなことをして子どもと別れることにしたが、このときは大いにとまどったことを今も記憶している。

学校ではより自由に

というわけであるから、子どものしつけにおける家庭、ことに両親の役割は大きく、早くから規範にむけて

の社会化は始まるようである。のちに述べるように幼稚園や学校ではしつけ教育にあまり重きをおかないから、それは家庭でおこなわれなければならないといえるし、また家庭でのしつけがなされていればこそ、それとは異なる学校教育が可能になるのだともいえる。その辺りはまさに相互的なのだろう。

こうしてフランスの親たちは、就寝時間を守り孤独と暗闇に耐えること、親に対しても「メルシー」ということを忘れないこと、大人の会話に口をはさんだりこれを妨げてはならないことなど、ある程度おとなの世界の規範に合致して行動することを幼児期から教えこむ。この点について多少の疑問もあったので、わたくしはある時フランス人の友人に意見をもとめてみた。「子どもに我慢することや孤独に耐えることをあまり早くから教えずなくとも、いずれ時がくれば具体的状況に直面して必要に応じて習得するのだから、あえて幼い時からひとりぼっちの不安にさらしたり、欲求不満を経験させる必要はないのではないか。」それに対し、すでに育児経験をも

つその友人の答えは、「自分たちもそう育てられてきたんだ。少しきびしくしてでも、子どもが規範を習得して早く自立するほうがよくないかね。それに、自立すれば、あとはわれわれ親はあまり子どもに干渉しないよ」であった。是非はともかく、ひとつの育児の論理としては筋が通っているといえよう。

そのためか、家庭の外の学校という場では、しつけ教育の占める位置は低くなるようである。この点について『フランスの親子・日本の親子』（NHKブックス）の著者有地亨氏はある比較調査にもとづきつぎのように書かれている。「フランスの教師が児童に対してきまりを守らせることをきびしく要求しているかといえば、そうではなく、最低であって、むしろ日本はアメリカについては非常にきびしく、教師は児童にきまりを守らせることを要求していることになる。このきまりを守らせることについては、フランスと日本では、教師と母親の場合が逆になっている。フランスは、母親は子どもに対してきまりを守らせることをきびしく要求するが、教師はそれほ

どきびしく要求しない。日本の場合は、教師はきまりを守らせることを児童に対してきびしく要求するが、母親はわが子に対してはきびしさを欠く対応の仕方をする。」

これはわたくしが経験したことともある程度符合する。先ほどふれたように、わたくしが子どもを通わせたのは幼稚園だけであるが、その幼稚園の降園時間に子どもを迎えに行つて、担任の保母さんに——ことばが不自由であるから、そういうこともふくめて——「今日はなにも問題はありませんでしたか」とたずねると、きまつて「なにも問題はありません、よく遊びましたよ」という返事が返ってきた。子どもがそ、そ、をしたことを後で知ったときも、おなじ返事であつて恐縮したことさえある。子どもの話をきいても、保母さんに叱られたという経験はないようで、朝の登園時には実に楽しげに園内にかけてこんでいくのであつた。

小学校からコレージュ、リセーへとなるともう少し別の色々な問題もでてくるようだが、こときまりの遵守といった点では、べつに制服があるわけでなし、他にこま

ごまとした規則があるわけでもなし、生活指導に学校がそれほど立ち入ることもないので、生徒はうるさくいわれることはないようだ。さきほどの友人のことはでいえば、この年頃になれば、家庭でも親からあまり干渉を受けなくなり、自立していくわけだから、規範の習得という子どもの時期はほぼ卒業したということであろうか。中学から高校という、日本では学校が生徒の生活指導にかなり神経をすりへらす時期であるだけに、このあたり、日本とのちがいは大きいようである。

近況から——少年の喫煙をめぐって

さて、わたくしは一昨年から昨年にかけて久しぶりややや長期のパリ滞在の機会をもった。半年ほどだったが、腰を落ちつけて日常生活に入っていくことができ、最近のいろいろな変化にも気づくことができた。若干の感想をのべておく。

カルチェ・ラタン内の大学関係のふるい建物で占められているある敷地の一角、表からみえにくい物影で、ラ

ンドセルを背負った二人の少年がなにかごそごそやっている。「こんな所になぜ小学生が？」と不思議に思いつつ通りすがりにふと目をやると、少年たちは顔をしかめながら、しかしおかしいほど真剣な表情でタバコを吸っていたのである。これは、わたくしがフランスでみたかぎりでの最低年齢の喫煙者であった。

また、有名なシャルトルの町の大聖堂を訪ねての帰途、モンパルナス駅へもどる汽車のなかで、せいぜい十五歳位とみえる小柄な少女が、時々喘をしながらもひっそりなしにタバコを吸いつづけ、周囲の乗客の好奇とも非難ともつかぬまなざしを浴びているのに出くわした（もちろん、喫煙車輛のなかでのことである）。このまなざしに抗するかのように、少女が時々挑戦的な眼でおとなたちをにらみ返していたのも、印象的であった。

かと思うと、パリの町なかのあるタバコ屋で、タバコをくれと小銭をさしだしたロティーンの少年にたいして、「あんたが吸うの？ それならわたしは売らないよ」とピシヤリと一言、女主人がツンと顔を横にむけてしら

ん顔をしている光景に出あったこともある。反対に、ロティーンと思われる少年になんのがめだてもせずタバコを売っている店もあったことを付けくわえておこう（この国にはタバコの自動販売機はない）。

パリで眼にしたこんな情景をわざわざするするのは、なにも喫煙の低年齢化、少年非行問題といったおきまりの観点からではない。道徳的価値判断は措いて、わたくしに印象的だったのは、ロティーンの少年少女たちの「自立」がさらにいっそう進んだな、という一点である。家では喫煙をうるさく禁じる親もいるだろうが、その裏をかいてかれらは冒険に乗りだす。これをピシヤリと封じようとする大人もいることは右に書いたが、せいぜい不快の色をこめたまなざしで牽制するか、あるいは「仕方がない、吸いたいならば吸わせておこう」とする大人、そして親も相当にふえてきているという感じをもった。虚々実々の攻防といえようか。

そんなことを考えながら、このことを話題にすると、わたくしは所屬していた研究機関につとめる一児の母の

あるフランス婦人はこともなげにいう。「子どもたちは好奇心からタバコに手をだすけど、ずっと成人まで吸いつづけるわけではない。しばらく吸って『もういいや』といってやめる子も多い。タバコがつまらないものと知るよい実地経験じゃないかしら。」べつの友人は、こんなふうにもいう。少年少女がタバコを吸うのがなぜわるいかを親が子に説明することはむずかしい。健康にわるいというならなぜ成年は吸ってよいのか、人に迷惑をかけるというなら禁煙の場所やタバコぎらいの人のいる所で吸わなければよいではないか、ということになってしまい、それ以上の説得は困難である、と。

後者の友人のことばは、いかにもフランスの家庭教育の特徴をものがたっていて面白い。「文句をいわずに親のいうことをききなさい！」とか「いけないものはいけないのです！」といった叱り方の通用しにくいこの国では、なるべく普遍的な規範に即して行動の是非を説いていかなければならないが、そうになると、成年がタバコを吸うのはよいが未成年者は吸ってはいけない、というこ

とを納得させる論理はできにくいということである。

とすれば、きわめて逆説的な意味で、フランスの家庭教育は今日なお健全ということになるのだろうか。

そんなことを考えさせてくれる別の小さな出会いをもわたくしは経験した。

パリからトゥールへの旅行の途次、汽車のコンパートメントでリセーのひとりの生徒とさし向かいになった。

旅の気安さで二、三言葉を交してみると、年長のわたくしを意識した丁寧な表現で、好感のもてる知的な返事が帰ってくる。しばらくすると少年はやおらタバコを取り出し、火をつけた。わたくしが「へえ、君はタバコを吸うの」となんとなく口にする、「御迷惑でしたか、すみません」と急いでもみ消そうとする。それに及ばないとその手を制して、わたくしたちは話しをつづけた（もちろん、それは禁煙のコンパートメントではなかった）。

途中のある駅で下車をするとき少年は、「よき御旅行とよきフランス滞在をお祈りします」と、きちんとした表現であいさつをし、握手をもとめ、コンパートメントを

出ていった。タバコを吸う高校生にすがすがしい印象をもった、といったらまことに奇異にひびくだろうが、これはいつわらざるひとつの感想である。

さて、ごく最近のパリでわたくしの見聞したこれらのことを、読者の方がたはどのように受けとめられるだろうか。この国のしつけや教育の現状と問題点をうかがううえで、若干の手がかりにはなりうると思うのである。

*

以上は、子どものこと、教育のことをまともに深く考えたり、勉強したこともない一社会学徒の、それもまずしい外国経験にもとづく手前勝手な子ども論である。非専門家の短見と実感重視から必然的に生じるであろう視野の一面性にたいして、ねがわくば読者諸氏が寛容であられんことを。

(お茶の水女子大学、社会学)

二月二十一日(日) 沢井 撰

ぬく時

おとといはぐまがいたか、た
ので、はいしゃに行きました。
はらさわ先生の所とちがう所
です。

「沢井さん。」

「よばれました。」

「これは、おとなのはが少し
出ているからです。」

「といわれしました。」

「いたいはぐまの所のはは、ぐ
らぐらです。」

「ぬくがな。」

「と思、たら先生が、ぬきます。」

「とい、たのであつたよる。」

「ほうとしましたと、え。」

「とび、くりしてどきどきしまし
た。」

「とたりのほもぬきます。」
といわれたので、めちやくちど
きどきしました。

ぬく時になりました。

さいしよにちやうしゃなので
どきどきしました。

ぐさつとさしました。

でもすぐぬきました。

一本に二回づつさしました。

中がわと内がわです。

さいしよのときだけいたかっ
たです。

十五分くらいまたされました。

次にこんどは、はをほんとうに
ぬくときになりました。

先生がぬこうとしました。

でもぬけませんでした。

まよう力のでや、たらぬけま

した。
ぬく時はいたくなくてぬいた
後かいたかいたです。
わたなかみしました。
三十分くらいですてました。
その時はもうすっかりちがお
さまっでいました。
でもよくおとなのはがでいて
たのがわかってすごく目がいい
のだと思います。



閉じた世界が開ける体験



津 守 真

その日は、私共にとつては、少しミゼラブルな状況かはじまった。秋のよく晴れた日であるが、四才の男児Mは、登園したときから外に出たくて、門から体を半分出して、母親の足もとに坐っていた。

Mは、普段は、自分で何かを見つけて、比較的ひとりよくあそぶ。けれども、人との結びつきは稀薄で、気分によっては外にとび出していっても不思議はないという危惧を感じさせるところがあった。こんな秋晴れの日

には、園内のどんな遊びも、外の魅力に勝てないかもしれない。

こんなとき、Mをひきとめようとして誰れかが近づいても、それは逆効果のはたらきになるように思えた。先生のひとりが、通りすがりに、ホールから積木を運んでみたらと私にささやいてくれた。おとな同志の好意的なヒントが、わきから光を投げかけてくれて、何と助けになることか。私は、Mは物を並べることが好きなのを思

い出した。箱積木を並べてその上を渡り歩くのは、Mがよくやっている活動のひとつである。

私は、ホールから庭を横切つて、門まで、箱積木をひとつずつ運んだ。Mは、それには無関心のように見え、私は何度もその間を往復し、無駄なことをしているのではないかと思ひながら、三十個ぐらいの積木を通路のように長く並べて置いた。私自身が、Mとは独立に、積木をつないで長くするという秩序をつくる活動を、いくらか無理をしながらも、自らを活気づけてやっていたことになる。

しばらくすると、Mよりも先に、何人かの子どもがその積木の上を歩いて渡りはじめた。そして、私が並べた積木の中から、長方形のものを選び出して、面ごとに違う色が塗つてあるのだが、緑色の面を出すようにして、並べかえた。

やがて昼食のとき、天気が良いので、テーブルが庭に出た。Mは、さっと走つて椅子をもつてきて、テーブルの前に坐つた。食事をしながらも、Mは積木の並べかえ

に従事した。そして、積木の通路の端には、タイヤを並べ、その上をいったり来たりした。数人の子どもも、一緒になつて、積木とタイヤの上を歩いた。

この日のみならず、日頃も、Mは物を並べて、自分だけの秩序をつくり出すことを遊びとする。それが自分だけの閉じた世界のことになるので、他の子どもがそれをこわしたり、もよう替えをすると承知しない。この日も、一、二度そういうことがあると、Mは積木の上に向つ伏して横になり、顔を伏せる。表立った抗議はしない、ひそかな悲しみの表現である。私が傍にしばらく坐っていると、この日は、Mはじぎに立ち上り、積木の上を渡りはじめた。私も他の子どもたちも、同じ積木の上を歩いた。すなわち、そのときには、Mの秩序の世界は、もはや完全に閉じた世界ではなく、他人によって共有されている。

私は、更に、物の秩序の世界に、水を持ちこむことに

よって、世界を開くことができなかと考えた。水は流出する物質である。如露に水をいれてMに渡すと、Mはそれを受取り、一定の場所に運んで水たまりをつくる。

それをくり返すうちに、私は、如露をMに手渡すときに、ゆっくりと渡し、ある瞬間は、Mと私が両方の側から同じ如露を握っている状態になるようにした。このことは、バケツの柄を受け渡すときには、もつとうまくいった。手と手がバケツの柄の一角所で触れるときには、Mは私を見た。Mと私との間で、共存感をもつことができた初めての体験だった。

このころには、すでに、Mは洋服を脱いで、素裸になっていた。Mは、気を入れて遊ぼうとするときには、洋服を脱いでしまう。社会的観念の象徴である衣服を脱ぎ捨て、ひたすらに自分の遊びに力を注ぐ子どもの姿である。普通の子どもは、こういう場合にも、実際に服をぬぐことはしない。この子どもたちは、人間の素朴な姿を、そのままに見せてくれる。私は、この素直な気持を尊重したい。この時期を通り過ぎて、次には、子どもは

社会を自覚して自制するようになることを、いまは児童期にはいった、同様の行動をしていた何人もの子どもたちについて、私共は見ている。

午後になって、帰る頃には、庭いっぱい、とりどりの色の積木とタイヤが並び、何人もの子どもが如露とバケツを運んでできた水たまりから、側溝に水が流れている。それは、子どもが存分に遊んだことをあらわす光景である。このひとつの光景を生み出すには、ここに述べてきた一日の過程がある。保育の実際を知る人には、珍らしくない、あたりまえの一日であろう。しかし、他のどの一日とも違う、この一日である。そこにふくまれる活動も、配慮も、具体的には他のどの日とも異なる。共通なことは、存分に遊んだこと、この一日の中で成長の体験をしていることである。

Mは、他人と存在感と共有し、閉じた世界が開かれる体験を、この日にしたのだと思う。

秋晴れの園外には、子どもにとって魅力のあるものはいくらかもある。外と内との間を揺れ動いている子どもを魅きつけるのは、子ども同士のことを別とすれば、保育者と出会う結びつきか、または、保育者が活力をもってつくり上げている活動かのいずれかであろう。前者が困難な子どもの場合には、後者の重要さが増す。このことは、この一日の出発点における問題点であった。

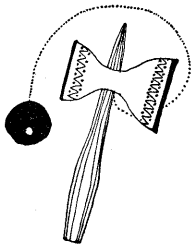
この子どもは、日頃から、物を並べ、閉じた秩序の世界をつくり出して活動することができている。これを開く力となったものは、この日のことから言えば、同じ活動に他の人が参加することと、流出する物質―水―であった。一方には、閉じていると見える子どもの世界を尊重することを出発点とし、他方には、形のない物質の力を導入することの重要さをあらためて考えさせられる。

この日、子どもが、衣服を脱ぎすてるほどに、自分の活動に力をいれることができたときに、その活動を他人と共存することができた。水を運んで差し出す大人と、

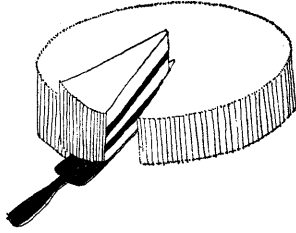
それを受けとる子どもと、存在感を共有する瞬間が生れた。また、そこで同じ活動をしている他の子どもたちと、直接の対話はなくとも、共存感があつたに違いない。

この一日の保育は、これに先立つ日日の保育と、この後に続く日日とに支えられてある。閉じた世界が開かれるのは、積み重ねられる日日の中で、徐々になされてゆく。いま、この一日に、私が気付かされたことは、そのひとこまにすぎない。けれども、他の一日と同様に、重要な一日であることに間違いはない。

* Mは、愛育養護学校幼稚園の子どもである。



近代短歌に現われた子ども
(十六)



大塚 雅彦

(35) 佐藤佐太郎

佐藤佐太郎は明治四十二年、宮城県柴田郡大河原町の農家に生まれたが、幼児父母と共に茨城県多賀郡平潟町（現北茨城市）に移住し、そこで成長した。高小卒業後上京し、大正十四年岩波書店に入り長く勤めた。戦災を受け同店を辞め帰郷、昭和二十年九月上京して青磁社に勤めた後、二十二年永言社という出版社を独力で始めたが思わしくなくてやめ、その後著述のかたわら、副業として養鶏をしたりした。歌人として名を成してから文筆業を貫き、こんにち最も声価の高い歌人の一人として活躍している。

彼は、大正十五年「アララギ」に入会、昭和二年以後、斎藤茂吉に師事し、その高足である。昭和二十年歌誌「歩道」を

創刊主宰し、現在に至っている。なお、志満夫人も歌人である。彼の作歌態度は茂吉門の俊足らしく写生に徹し、あくまでも抒情詩としての短歌の純粹性を追究する不動の立場を堅持しており、いわゆる「純粹短歌論」として知られている。あまり外形的な現象や動きに左右されず、「自然」と「日常性」の中に詩を求め、狭い、「個」の詠嘆に執してうたい、社会生活の反映に欠けるという批判はあるが、深く鋭い觀察の眼と精緻な技法とをもっている。最近では「写生」は大切だが、写生に縛られないで自由に行く、というのがこの頃の私の考え方の一つだ」（『及辰園歌話』）——「短歌」昭57・2」と述べ、「感じたことを思い切って表現すること」（同）と断定している。師風随順から進んで新風を生み出した自信の程を示すものであろうか。

彼は処女歌集『歩道』（昭15）でいち早く歌壇の注目を浴びたが、『しろたへ』（昭19）、『立房』（昭22）等でゆるぎない地歩を築いた。歌集はこの他に『帰潮』（昭27）、『地表』（昭31）、『群丘』（昭37）等を始め、一番最

近の『星宿』（昭58）に至るまで合計十二冊あり、『帰潮』では読売文学賞を、第十歌集『開冬』（昭50）では芸術選奨文部大臣賞を、また『佐藤佐太郎全歌集』（昭52）では第一回現代歌人大賞をそれぞれ受けており、更に、短歌の業績により日本芸術院賞を昭和五十一年に受けている。彼はその他の著作も多く、『純粹短歌』（昭28）のような歌論書、『短歌入門ノオト』（昭26）、『短歌の話』（昭32）、『短歌指導』（昭39）のような入門書、啓蒙的な手引書、『及辰園百首付自註』（昭49）の如き自註書、『枇杷の花』（昭43）、『及辰園往来』（昭51）のような隨筆書、『長塚節全歌集』（昭26）のような編纂書等、すこぶる多岐にわたる。特に師の茂吉に関する著書も多く、『齋藤茂吉研究』（昭32）、『茂吉解説』（昭52）、『茂吉秀歌』上・下（昭53、岩波新書）、『董馬山房隨聞』（昭51）、『齋藤茂吉言行』（昭48）等、茂吉研究者、愛好家の必読書となっているものも少なくない。また、岩波版の『鷗外全集』『齋藤茂吉全集』等の編集委員の一人であったことも、逸してはならない。

① 一月もたたぬ赤子に話しをり滑稽ともつかず哀れともつかず

② 幼子を芝生のうへに立たしめて幼子の顔いたく小さし

③ 人つどふ駅にゐしかばすこやかに足日焼せし少女をも見つ

④ ゆくりなくわがをとめごの掌を見たり大きくなりし掌

⑤ あるときは幼き者を手にいただき苗のごとしと謂ひてかなしむ

⑥ 童女にもときに重厚のかたちありわれに向ひてもめ言はず立つ

①は歌集『歩道』より抄出。「嬰兒」という一連にある。私はこの一連を短歌綜合誌に始めて見たとき、当時ひどく清新な感じがして感銘したのを記憶している。この歌も下句の口語会話調のような一見放胆な表現がえも云われぬ味わいをもつのに驚き、何度もくちずさんだものである。生まれて一ヶ月もたたぬ赤ん坊に大人の言う

ことがわかる筈もないが、それでも若い父親が、あやしむながらその赤子に話しかけている動作が眼に見えるようで、不思議なユーモアやペースがあり、また、始めて父親になった作者の喜びが揺曳しているようである。

作者は昭和十三年一月結婚し、十五年一月長女肇子を得た。この一連は昭和十五年作で、この歌の次に「嬰兒をはぐくむ妻は或時に牛の仔を吊すごとくあつかふ」という作があり、この歌の下句にも、若い母親である自分の妻の動作を、不思議なものを見るような思いで眺めている作者の微妙な気持が、フォームを伴って詠出されている。ちなみにこの処女歌集『歩道』は「二ヶ年の間に四刷を重ね、当時の歌壇に一つの時期を劃した」（由谷一郎『鑑賞佐藤佐太郎の秀歌』昭57・3）もので、フレッシュで鋭利、繊細な近代的抒情が高く評価されたのであった。

②は歌集『しろたへ』より抄出。当時作者は明治神宮表参道の同潤会アパートに住んでいて、休日など幼子（満一才の肇子）を神苑の芝生に伴って遊ばせることがあったというが、そんな場合の作であろうか。由谷一郎

氏は「立たしめて」も「へいたく小さし」も如何にも突きはなしたような言い方である。だがその「軽簡」な表現の中に深い愛情がこもっている。殊に「へいたく小さし」など驚きを交えた喜びの声といった感じさえする」（由谷、前掲書）と述べている。ちなみに『しろたへ』には、幼子を扱った佳作が多い。「梨の香とニスの香として小さな茶棚のまへに幼子ゐたり」「泣きながら負はれていでし幼子は背せなにねむりて帰り来るべし」「をさな子は驚きやすく吾がをればわれに走りて縫うる時あり」等である。

③は歌集『群丘』より抄出。昭和三十三年作で、「街一連にある。この年、作者四十九才である。夏の日の駅頭の属目であるが、一連の中には清州橋や勝鬨橋かちどき等も詠まれてゐる。一首の眼目は「すこやかに足日焼せし」であるが、作者は自ら二人の娘（当時十八才と十六才）を持つていただけに、少女の姿などが他人よりも余計に目についたのかもしれない。駅の雑踏の中で、他人があまり眼をつけない少女の足の日焼を観察し、しかもそれを

「すこやかに」と感受している。あたたかい心のこもる歌である。

④も『群丘』抄出。「掌」一連にあり、昭和三十五年作である。自註によると、この「わがをとめご」は次女洋子であるから、当時十八才である。思いがけなく娘の掌を見たら、気づかないうちに何と大きくなっていったとか、というのであろう。人は、他人の掌などをじっくりと見るなど、日頃あまりしない。まして自分の娘の掌など尚更だ。それをたまたま見て娘の成長を感じ、驚いている作者。男親の愛情というものが滲み出てくるような歌である。「掌」という語の重出も気にならない佳品だ。

⑤は歌集『形影』（昭45）より抄出。「幼児」一連の中にある。昭和四十三年作で、作者は五十八才になっている。つまりこれは孫の歌である。一般に誰でも孫の歌には大体、よい作品がない。他愛なく対象に溺れてしまつて甘くなり、緊張を欠き放恣になるからだ。だから「孫の歌は絶体に作らない」という歌人もいる。だが、この

佐太郎の孫うたは面白い。手に抱いた幼な児を「苗のごとし」といった作者の「感受のみずみずしさに眼をみはる思いがする」「いいようのないやさしさ」が一首をつらぬいている」と長沢一作氏は述べている（今西幹一・長沢一作、『佐藤佐太郎』昭56・1）。「苗」はまだ幼く弱いもの、独り立ちの出来ないものである」と自註にある。この比喩は巧みで、筆者はなぜか「人は輩のごとく最も弱いものである」という哲人パスカルのあの有名なことばを、この歌に思い出す。なお、「中国詩を読んでいるから、こう言えたが、中国詩を読んだ誰もがこう言ったのでもない」と作者の自註にあるが、たしかに「苗のごとし」の表現には「背景に中国詩があるものの、この把握は作者の直観によるものと私は思っている。この直観が素晴らしい」と加古敬子氏が述べている（「短歌」昭56・5「特集・佐藤佐太郎」）通りであろう。なお、この歌の次に「いつよりといふけじめなく幼子の音たしかにて階段を踏む」という一首が続いており、これも鋭い聴覚をはたらかせた印象にのこる歌である。

⑥は歌集『開冬』（昭50）より抄出。「初夏日々」一連にあり、昭和四十六年作である。幼児にも幼い心に怒りでもたたえていいのか、対者である作者に向ってものも言わずに立っている。その状態を「ときに重厚のかたちあり」と述べている。幼児の生誕の或るときを、このように把握した歌は珍しいのではないか。何か思想性を含んだような表現であって、しかもそれが一首の中で遊離していない。幼児への玄妙な思いを湛えた作である。

なお『開冬』には「みはりたる二つの瞳そのなかに老いて恥多き吾は映らん」「あやつりの人形のごと嬰兒のみちたりて腕をふるさまあはれ」「葉の花の咲く冬晴の渚みちあゆむ幼は今年足つよし」等の幼子をうたった佳作がある。

(36) 近藤芳美

近藤芳美は本名芽美、大正二年、父の任地である朝鮮慶尚南道の馬山で生まれた。父は銀行員であった。十二才の折に馬山小学校を退き内地に引揚げ、広島市の祖母

の家に寄寓し広島二中（現観音高校）を経て旧制広島高校をおえ、東京工大建築科に入り昭和十三年に卒業した。建設会社清水組に入社、建築技師として京城に赴任。現地で相思の中村年子と結婚、その昭和十五年に東京勤務となり帰国。同年九月広島連隊に召集、中国に出征したが、結核のため広島病院に転送され、召集解除となった。戦時中は浦和に疎開、戦後上京し引続き清水建設に勤務し、昭和四十八年（六十才）これを退職、神奈川県川大学工学部教授（工学博士）となり、今日に至っている。

彼は中学時代から作歌したというが、本格的な歌への熱中は、広島高校に入り同校短歌会に所属し、更に「アララギ」に入会してからであろう。高校二年の折に療養中の中村憲吉を広島郊外に訪ねて師事した。憲吉没後は土屋文明の指導を受け、文明門下の逸材となった。終戦直後の混沌たる時代にいわゆる「新歌人集団」（この集団の短歌史的意義に就ては、集団の仲間の一人である加藤克巳の著『新歌人集団』昭57・9参照）の代表的存在と

して、新歌風を樹立した。昭和二十六年に歌誌「未来」を創刊主宰して現在に及んでいる。昭和三十年から朝日歌壇の選者として今日もそれを続け、また、昭和五十二年から現代歌人協合理事長となり、歌壇のまとめ役として重きをなしている。ちなみに年子夫人も歌人である。

彼の作風は、処女歌集『早春歌』（昭23）などではみずみずしい清純な相聞歌によって読者を甘美優婉な世界に誘い、妻をうたう愛のうたは後の諸歌集にも尾を曳いてゆくが、続く『埃吹く街』（昭23）、『静かなる意志』（昭24）、『歴史』（昭26）等で、不安な時代に生きる「誠実なインテリゲンチヤの心情」を詠出し一種の「思想のうた」を呈示し、また、戦後の大都市の酷薄無慚な世相や、終戦直後の荒廃した光景を鋭角的にとらえてうたった（拙稿「近藤芳美」——吉田精一他編『現代短歌評釈』昭41・2参照）。彼自身、歌論集『新しき短歌の規定』（昭27・4）で、「新しい歌」とは「今日有用の歌の事」で、それは「今日この現実生きて居る人間自体を、そのままに打出し得る歌」と規定し、その要素として「健

康な表現をとること」「簡潔であること」「素材派であること」「作品自体の中になまなまとした思惟がある事」等を挙げている。また、彼の門下の岡井隆は「近藤芳美から教えられたことども」（岡井『近藤芳美と戦後世界』昭56・8）で、それを(1)生き方（いかに生くべきか）の提示、(2)思想を歌うこと、(3)占領下の日本という認識、(4)「主義」と「生活について」――の四つを挙げている。

近藤の歌集は上記の他に最近の『聖夜の列』に至るまで計十三冊あり、また『定本・近藤芳美歌集』（昭53・1）も刊行されている。歌論集も上記の他に『現代短歌』（昭28）、『茂吉死後』（昭44）、『短歌思考』（昭54）等があり、研究的なものに『土屋文明』（昭36）、『石川啄木における文学と生』（昭39）、『土屋文明の秀歌』（昭50）等、自叙伝的小説に『青春の碑』第一部・第二部（昭39）、鑑賞的解説書に『愛の歌』（昭39）、『無名者の歌』（昭49）、随筆集に『アカンサスの庭』（昭40）等、著書はすこぶる多い。

①一日をなすなき少年ヴァイオリンを弾きに行く彼ら

の晩餐のため

②測量に共に苦しみし金少年蛙を焼きて吾に喰はしめ
き

③胸小さき裸の少女歌ひ合ひ灯ともれば酸^すぎ人の匂ひ
よ

④河合教授追はれたりし日知らむとし思ひつめたる少
年は来る

⑤戦争を止むなしと皆声合はず小学生らの或る日のつ
どひ

⑥秘めし思想も求めし戦死も吾のみ知り今日聞く君が
遺^ゐし児のこと

⑦盾の下に打たるる少女の面しろく雨に群衆の走るひ
とかた

近藤夫妻には子がいない。そのせいか幼な児などをうたった歌はあまりない。その代り、他人の子である少年少女をうたった作品は、抄出諸歌の如く少なくない。①から③までは歌集『静かなる意志』より抄出。①は「夜毎に」の一連にある。どんな少年なのだろうか？ 昼間は

何もしないで、夕方になってどこかへヴァイオリンを弾きに行く、それも彼等の夕食を得るためだ、というのであろう。貧しい少年をうたってまさしく終戦直後の風俗を描いたユニークな作だ。②は「動乱の日」一連にある。

近藤は戦前に朝鮮の建築現場で働いた。その折一緒に働いていた金という少年を、昭和二十三年の時点で思い出してうたっているのだ。蛙を焼いて作者に喰わしたと少年というのが強烈な印象を与える。③は「雨のあと」一連にある。どこか劇場か酒場内の作か？ 舞台で歌い合う胸の薄いまだ少女の裸かの踊り子（歌手？）と、客席で聴いている作者。少女への愛憐の情。そして灯がつくと思いついたように襲ってくる酸い人間のむれ臭さ。「灯ともれば酸き」が、やはり迫力にみちた表現として読者を衝つ。④は歌集『歴史』の「海に低き日」一連にある。有名な河合東大教授追放事件（粕谷一希『河合栄治郎』昭58・5等参照）を知ろうとする少年のひたむきな表情。⑤は歌集『冬の銀河』（昭29）の、同名の一連にあるが、これは戦慄すべき光景ではなからうか！『き

けわだつみのこえ』の戦没学生がこのさまを見たら、どう言うであろうか……。⑥は歌集『異邦者』（昭44）の中にある。昭和三十六年作。「秘めし思想」はマルキンズムで、その思想の持主だった友人が挫折感か何かで志願兵にでもなって征き戦死した、ところが彼の愛する女性には妊娠していて遺児が生まれていたのだろう。「胎に置いたままの出征と戦死をあわれに思っている感情が十二分に出ている」（田井安曇『近藤芳美』昭55・5）歌だ。⑦は歌集『遠く夏めぐりて』（昭49）の「六月」一連にある。この一連はデモ隊と機動隊の衝突を生まましく描き、後者の「盾」の下に打たれ顔面蒼白の少女や、その背後の群衆を⑦は描出している。

（お茶の水女子大学）

戦後の異郷に遺棄された人々、いわゆる「中国残留孤児」と呼ばれる人たちの集団が、再度訪日して肉親を探す営みを始めている。連日、テレビの画面に現われる期待と不安に満ちた表情に接しながら、人間にとって、「祖国」とか「故郷」というものは、一体、何なのだろうかという、言いようのない思いに抱えられている。

この人たちは、生後間もなく肉親と別れて中国人の手に委ねられ、中国式の育児法で育てられた。中国語を話し、中国風に生活し、中国人として思考し行為するであろうことはいうまでもない。しかも、現在は、中国人の配偶者や子どもに囲まれて、中国社会の一員として生きていくわけだ。にもかかわらず、これまで何のかかわりもなく、見たこともない日本に、「祖国」「母なる故郷」として、こんなにも熱く切ないまなざしを注ぐとは……。

「故郷喪失」などという言葉を、私どもは安易に口にするけれど、「故郷」の方では、さほど簡単に私どもを手放してはくれないのかも知れない。「祖国」とか「故郷」とかいうものは、あれこれの具体的結び付きを超えて、私どもの中に、しっかりと深い根を下ろしているのだろうか。

然し、一方では、海外で育った若い人たちから、こんな言葉が聞かれる。「自分の両親は日本人であり、髪も目も黒いけれど、私自身は日本人だと思っていない。自分のアイデンティティは、幼児期からハイスクールまで、アメリカで形成された。英語で感じ考える自分は、むしろアメリカ人ではないかと思う」と……。人としてのすべてを中国に負いつつ、なお日本人であろうとする人々と、この若い人たちの二様の言動は、私どもに何を問いかけているのだろうか。(H)

幼児の教育 第八十三巻 第二号

二月号 ◎

定価三〇〇円

昭和五十九年 一月二十五日 印刷

昭和五十九年 二月 一日 発行

東京都文京区大塚二ノ一ノ一

お茶の水女子大学附属幼稚園内

編集兼 発行人 本 田 和 子

東京都文京区大塚二ノ一ノ一

お茶の水女子大学附属幼稚園内

発行所 日本幼稚園協会

東京都港区三田五ノ一二ノ一

印刷所 図書印刷株式会社

東京都千代田区神田小川町三ノ一

発売所 株式会社 フレーベル館

振替口座東京九一一九六四〇番

◎本誌御購読についての御注文は発売所 フレーベル館にお願いいたします

※万一製品不良品がございましたら、おとりかえいたします。

好評発売中!!

保育のアイデア 春・夏・秋・冬 (全4巻)

関口 準／荒木久子・井尻佳代子・井上道子・岩瀬満佐江・加藤敏子・川並知子
菊地明子・鶴田一女・富重ミチカ・中臣浩子・中村鈴子・平山照子 編著

年間の子どもの姿と保育活動を網羅!!

このシリーズは若い先生方を対象としたもので、毎日の保育を充実させる“保育のアイデア”がたくさん盛り込まれています。

それも奇をてらったものではなく、あくまでも現実に即したアドバイスや、保育をすすめるうえでの具体的な指針について紹介され、新鮮でおもしろいアイデア、なるほどと思うアイデアがいっぱいです。幼児の園生活を春・夏・秋・冬(全四巻)

に分けて、それぞれの時期に見られる4歳児と5歳児の、「子どもの姿」の特質を述べ、体験させたい「活動内容」、実際の保育で行なわれた「実践事例」などで構成されています。どの項目も、現実に保育の現場で苦労されている先生方が執筆されていますので、すぐ役に立ちます。

A5判・各280頁・セットケース付
定価各1,500円・セット定価6,000円

改訂版

栄養価計算つき

保育所給食とおやつづくり方

椋田久美子・北野弘子・藤本真美子・吉田倫夫 共著

イラスト入りで調理法がわかりやすく、栄養価計算が出しやすい本

0歳児、1～2歳児、3～5歳児の年齢に合わせた献立と調理法が紹介され、さらに保育所給食1年間の献立案や、それに基づいて栄養価計算(四訂)をした年間献立例、行事料理献立例なども紹介しています。

これらはいずれも最新データに

基づき、より正確な内容に改められています。

給食とおやつが乳幼児の心身の成長にどのような影響を与えているかを「偏食」「むし歯」「肥満」の問題と共に詳説しています。

B5判・192頁・定価2,200円

くわしくはフレーベル館代理店・特約店・支社・支店・営業所または本社営業課(03)292-7781(代)にお問い合わせください。

フレーベル館

フレーベル館の8大月刊誌

内容がさらに充実!! 団体価格は、据え置きといたしました。

①—情操

キンダブック

年少・年中児向けの絵本で、夢のある心たのしいお話は情操を豊かにし、創造力を高めます。

(ワイド画面) 団体購読価 月250円

キンダー おはなしえほん

幼児の心を生き生きと育てる美しく感動的なお話は、繰り返して読んで楽しめます。

(上製本) 団体購読価 月300円

②—観察

キンダブック

年長児向けの絵本で、観察の眼を育て心情を豊かにする魅力いっぱいの観察絵本です。

(ワイド画面) 団体購読価 月250円

大きく見やすくなりました!!

がくしゅう おおぞら

子どもの知的欲求に応えながら、よく考える子、遊び上手な子に育てる絵本です。

(総合絵雑誌) 団体購読価 月300円

しぜん-キンダブック③

自然のようすや、その不思議がよくわかるよう編集された好評の科学絵本です。

(上製本) 団体購読価 月300円

ころころえほん

園生活で初めてふれる、2~3歳児のための明るい絵本。幼ない子とのスキンシップが楽しめます。

(厚紙製本) 団体購読価 月220円

キンダーメルヘン

年少・年中児向けのお話絵本で、“夢とゆとり”が生まれるよう配慮されています。

(厚紙製本) 団体購読価 月220円

保育専科

—今月のカリキュラム—

先生方の悩みに応える実践的な保育雑誌です。また別冊は年3回発行いたします。

定価400円 (別冊とも年間7,800円)

くわしくはフレーベル館代理店・特約店・支社・支店・営業所または本社営業課(03)292-7781(代)にお問い合わせください。

フレーベル館